相生市・緑ヶ丘窯址群Ⅱ

—山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告XIII—

平成７年３月
（１９９５年）

兵庫県教育委員会

例　言

1．本報告書は山陽自動車道建設に伴い、日本道路公団の委託を受けて昭和55年度に発掘調査を実施した緑ヶ丘窯址群の乳母ヶ懐３号窯・緑ヶ丘落矢ヶ谷９号窯～11号窯の発掘調査報告書である。

2．山陽自動車道建設に伴う緑ヶ丘窯址群の発掘調査のうち、昭和54年度実施分については、昭和61年度に『相生市・緑ヶ丘窯址群－山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告　Ⅳ－　』として調査報告書を刊行しており、今回の報告書は同報告書の第２冊にあたる。

3．窯址の所在地は下記の通りである。

乳母ヶ懐３号窯　　相生市那波字乳母ヶ懐

緑ヶ丘落矢ヶ谷９号窯～同11号窯　　相生市那波字落矢ヶ谷

4．兵庫県教育委員会における調査番号は下記の通りである。

乳母ヶ懐３号窯　　８００００１

緑ヶ丘落矢ヶ谷９号窯　８００００２

緑ヶ丘落矢ヶ谷10号窯　８００００３

緑ヶ丘落矢ヶ谷11号窯　８００００４

5．発掘調査は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所の吉田昇・森内秀造・種定淳介が担当し、本報告書の執筆・編集については森内秀造が行なった。また、編集にあたっては、佐々木誓子と白谷朋世の協力を得た。

6．遺物番号の表示は図版・図面・本文を通して統一した。

7．須恵器の窯跡を指す考古学用語としては、「窯跡」・「古窯跡」・「窯址」・「古窯址」などがあるが、本報告書では「窯跡」の用語を用いる。但し、各地域の窯跡群名称については、報告書あるいは論文で用いられている名称（～古窯跡群・～古窯址群など）をそのまま使用する。従って、本窯跡群名についても前報告書に従い『緑ヶ丘窯址群』とする。また、窯跡名称については「～窯」とし、「跡」または「址」を省略する。

8．窯体長については水平位に直さず、実長を用いた。窯体内の各部位、灰原の規模も同様である。

9．整理後の遺物については、兵庫県教育委員会魚住分館に保管している。

10．調査および報告書の作成にあたっては、下記の方々のご指導とご教示を仰いだ。記して感謝の意を表するものである。

後藤博弥（神戸女子大学教授）・三辻利一（奈良教育大学教授）

鈴木豊彦（相生市立那波中学教諭）・河井孝幸（相生市教育委員会）・木津信行（同）

那波鳳翔（播州相生焼　陶芸作家）

（敬称略）

本文目次

第１章　発掘調査の経過

第１節　調査に至る経過 …… 1

第２節　昭和55年度の発掘調査 …… 2

第３節　整理事業の実施 …… 2

第２章　相生窯址群

第１節　相生窯址群の分布 …… 3

第２節　緑ヶ丘落矢ヶ谷支群の分布 …… 4

第３章　発掘調査の成果

第１節　乳母ヶ懐３号窯

１．窯の立地と構造 …… 7

２．遺物 …… 10

第２節　緑ヶ丘落矢ヶ谷９号窯

１．窯の立地と構造 …… 13

２．遺物 …… 17

第３節　緑ヶ丘落矢ヶ谷10号窯

１．窯の立地と構造 …… 19

２．遺物 …… 21

第４節　緑ヶ丘落矢ヶ谷11号窯

１．窯の立地と構造 …… 23

２．遺物 …… 25

第４章　相生窯址群における平安期の遺物について

第１節　緑ヶ丘落矢ヶ谷支群における須恵器の変遷と特徴

１．器種構成の特徴 …… 27

２．糸切り平高台椀（椀Ｃ）における法量の分析 …… 29

３．緑ヶ丘落矢ヶ谷支群における須恵器窯の構築順位について …… 34

第２節　相生窯址群における編年の再考

１．編年の概要 …… 36

２．年代比定について …… 46

第３節　まとめにかえて …… 47

表目次

第1表　緑ヶ丘落矢ヶ谷支群器種構成表

挿図目次

挿図1　相生市位置図
挿図2　調査位置図
挿図3　相生窯址群分布図
挿図4　緑ヶ丘落矢ヶ谷支群分布図
挿図5　乳母ヶ懐3号窯　調査位置図
挿図6　乳母ヶ懐3号窯　地形測量図
挿図7　乳母ヶ懐3号窯　窯体実測図
挿図8　緑ヶ丘落矢ヶ谷9号窯　地形測量図
挿図9　緑ヶ丘落矢ヶ谷9号窯　第1次窯体実測図
挿図10　緑ヶ丘落矢ヶ谷9号窯　第2次窯体実測図
挿図11　緑ヶ丘落矢ヶ谷9号窯　窯体・灰原縦断面図
挿図12　緑ヶ丘落矢ヶ谷9号窯～11号窯　調査位置図
挿図13　緑ヶ丘落矢ヶ谷10号窯　地形測量図
挿図14　緑ヶ丘落矢ヶ谷10号窯　窯体実測図
挿図15　緑ヶ丘落矢ヶ谷11号窯　窯体実測図
挿図16　緑ヶ丘落矢ヶ谷11号窯　地形測量図
挿図17　椀Cの口径と器高の分布図1
挿図18　椀Cの口径と器高の分布図2
挿図19　椀Cの口径と底径の分布図1
挿図20　椀Cの口径と底径の分布図2
挿図21　落矢ヶ谷支群における特定器形の消長
挿図22　相生窯址群編年図1（その1）
挿図23　相生窯址群編年図1（その2）
挿図24　相生窯址群編年図2（その1）
挿図25　相生窯址群編年図2（その2）
挿図26　相生窯址群編年図2（その3）
挿図27　相生窯址群編年図2（その4）

図面目次

第１図　乳母ヶ懐３号窯　出土須恵器
第２図　乳母ヶ懐３号窯　出土須恵器
第３図　乳母ヶ懐３号窯　出土須恵器
第４図　乳母ヶ懐３号窯　出土須恵器
第５図　乳母ヶ懐３号窯　出土須恵器
第６図　乳母ヶ懐３号窯　出土須恵器
第７図　乳母ヶ懐３号窯　出土須恵器
第８図　乳母ヶ懐３号窯　出土須恵器
第９図　乳母ヶ懐３号窯　出土須恵器
第10図　緑ヶ丘落矢ヶ谷９号窯　出土須恵器
第11図　緑ヶ丘落矢ヶ谷９号窯　出土須恵器
第12図　緑ヶ丘落矢ヶ谷９号窯　出土須恵器
第13図　緑ヶ丘落矢ヶ谷９号窯　出土須恵器
第14図　緑ヶ丘落矢ヶ谷10号窯　出土須恵器
第15図　緑ヶ丘落矢ヶ谷10号窯　出土須恵器
第16図　緑ヶ丘落矢ヶ谷10号窯　出土須恵器
第17図　緑ヶ丘落矢ヶ谷11号窯　出土須恵器
第18図　緑ヶ丘落矢ヶ谷11号窯　出土須恵器
第19図　緑ヶ丘落矢ヶ谷11号窯　出土須恵器
第20図　緑ヶ丘落矢ヶ谷11号窯　出土須恵器

写真図版目次

図版１（ａ）乳母ヶ懐３号窯　検出状況
（ｂ）乳母ヶ懐３号窯　セクション設定状況
図版２（ａ）乳母ヶ懐３号窯　窯体・灰原縦断セクション
（ｂ）乳母ヶ懐３号窯　窯体セクション
図版３（ａ）乳母ヶ懐３号窯　窯体（遠景）
（ｂ）乳母ヶ懐３号窯　窯体
図版４（ａ）緑ヶ丘落矢ヶ谷９号窯　調査前
（ｂ）緑ヶ丘落矢ヶ谷９号窯　検出状況
図版５（ａ）緑ヶ丘落矢ヶ谷９号窯　セクション設定状況
（ｂ）緑ヶ丘落矢ヶ谷９号窯　窯体内第２次床面　遺物出土状況
図版６（ａ）緑ヶ丘落矢ヶ谷９号窯　第１次窯体　（遠景）
（ｂ）緑ヶ丘落矢ヶ谷９号窯　第１次窯体　（近景）

図版７（ａ）緑ヶ丘落矢ヶ谷９号窯　第２次窯体と第１次窯体の重層状況
（ｂ）緑ヶ丘落矢ヶ谷９号窯　灰原縦断セクション
図版８（ａ）緑ヶ丘落矢ヶ谷10号窯　調査前
（ｂ）緑ヶ丘落矢ヶ谷10号窯　検出状況
図版９（ａ）緑ヶ丘落矢ヶ谷10号窯　セクション設定状況
（ｂ）緑ヶ丘落矢ヶ谷10号窯　窯体
図版10（ａ）緑ヶ丘落矢ヶ谷10号窯　遺物出土状況（焼成部先端）
（ｂ）緑ヶ丘落矢ヶ谷10号窯　遺物出土状況（焼成部先端）
図版11（ａ）緑ヶ丘落矢ヶ谷10号窯　窯体
（ｂ）緑ヶ丘落矢ヶ谷10号窯　窯体（焼成部先端）
図版12（ａ）緑ヶ丘落矢ヶ谷11号窯　調査前
（ｂ）緑ヶ丘落矢ヶ谷11号窯　検出状況
図版13（ａ）緑ヶ丘落矢ヶ谷11号窯　セクション設定状況
（ｂ）緑ヶ丘落矢ヶ谷11号窯　窯体
図版14（ａ）緑ヶ丘落矢ヶ谷11号窯　遺物出土状況（焼成部先端）
（ｂ）緑ヶ丘落矢ヶ谷11号窯　遺物出土状況（焼成部中央）
図版15（ａ）緑ヶ丘落矢ヶ谷11号窯　灰原縦断セクション
（ｂ）緑ヶ丘落矢ヶ谷11号窯　灰原横断セクション
図版16（ａ）緑ヶ丘落矢ヶ谷11号窯　窯体　（遠景）
（ｂ）緑ヶ丘落矢ヶ谷11号窯　窯体　（近景）
図版17　乳母ヶ懐３号窯　出土須恵器
図版18　乳母ヶ懐３号窯　出土須恵器
図版19　乳母ヶ懐３号窯　出土須恵器
図版20　乳母ヶ懐３号窯　出土須恵器
図版21　乳母ヶ懐３号窯　出土須恵器
図版22　乳母ヶ懐３号窯　出土須恵器
図版23　乳母ヶ懐３号窯　出土須恵器
図版24　緑ヶ丘落矢ヶ谷９号窯　出土須恵器
図版25　緑ヶ丘落矢ヶ谷９号窯　出土須恵器
図版26　緑ヶ丘落矢ヶ谷９号窯　出土須恵器
図版27　緑ヶ丘落矢ヶ谷10号窯　出土須恵器
図版28　緑ヶ丘落矢ヶ谷10号窯　出土須恵器
図版29　緑ヶ丘落矢ヶ谷10号窯　出土須恵器
図版30　緑ヶ丘落矢ヶ谷11号窯　出土須恵器
図版31　緑ヶ丘落矢ヶ谷11号窯　出土須恵器
図版32　緑ヶ丘落矢ヶ谷11号窯　出土須恵器
図版33　緑ヶ丘落矢ヶ谷11号窯　出土須恵器
図版34　緑ヶ丘落矢ヶ谷11号窯　出土須恵器

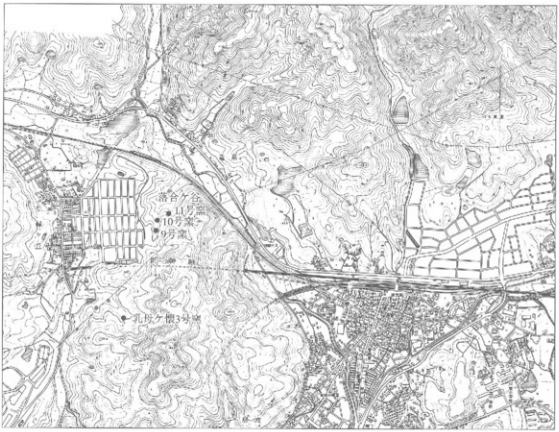
第１章　発掘調査の経過

第１節　調査に至る経過

山陽自動車道は正式には「高速自動車国道　山陽自動車道　吹田山口線」といい、大阪府吹田市を起点に山口県山口市に至る延長 434kmの高速道路である。吹田市から神戸市北部までは中国自動車道と重複しており、神戸市北区の神戸ジャンクションにおいて、中国自動車道と分岐する。

兵庫県内を通過する山陽自動車道の建設工事は、第６次施工命令区間の工事区間として県西部の赤穂市・相生市側から計画された。この工事計画に伴い、兵庫県域における山陽自動車道関連の最初の埋蔵文化財発掘事業として昭和54年度に赤穂市堂山遺跡とともに相生市緑ヶ丘窯址群の発掘調査が兵庫県教育委員会によって実施された。

挿図１　相生市の位置



挿図２　調査位置図（２万分の１、方位北）

当初、路線内で確認されていた緑ヶ丘窯址群内の須恵器窯跡は緑ヶ丘落矢ヶ谷1号窯の1基のみであったが、発掘調査着手後、路線内から新たに9基の窯跡（落矢ヶ谷2～4号窯・7～8号窯・9～11号窯・乳母ヶ懐3号窯）が発見された。このうち落矢ヶ谷1号窯～4号窯・同7号窯・同8号窯の6基の窯跡については、予定期間を延長して昭和54年度内に調査を実施したが、残る落矢ヶ谷9号窯以下の4基については、これ以上の期間延長が困難という教育委員会側の事情から日本道路公団と協議の結果、翌55年度に発掘調査を実施することになった。

なお、昭和54年度に発掘調査を行った落矢ヶ谷1号窯～4号窯・同7号窯・同8号窯の6基の窯跡については遺物整理事業が完了し、昭和60年度に『相生市・緑ヶ丘窯址群－山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ－』（兵庫県文化財調査報告書　第33冊）として報告書をすでに刊行している。

第2節　昭和55年度の発掘調査

前述の通り、昭和55年度に調査が繰り延べされた窯址は緑ヶ丘落矢ヶ谷9～11号窯の3基と那波乳母ヶ懐3号窯の計4基である。

昭和55年度の発掘調査は4月14日より乳母ヶ懐3号窯から着手し、続いて落矢ヶ谷11号窯・落矢ヶ谷9号窯・落矢ヶ谷10号窯の順に調査を実施し、7月末に全調査を完了した。

発掘調査については、当初、社会教育・文化財課技術職員の吉田昇と森内秀造が担当したが、同課技術職員の種定淳介が6月1日より森内と交代して調査にあたった。このため、乳母ヶ懐3号窯と落矢ヶ谷11号窯の調査前半期は吉田と森内、落矢ヶ谷11号窯の調査後半期から落矢ヶ谷10号窯・落矢ヶ谷9号窯の発掘調査については吉田と種定が行った。

なお、道路計画予定地に隣接して乳母ヶ懐2号窯が隣接していることから、同窯の範囲が路線内に及んでいるかどうかの確認のための試掘調査を実施したが、その範囲は計画路線内に及んでいないことが判明した。

第3節　整理事業の実施

以下の年次計画により遺物整理事業を実施した。

平成2年度　遺物接合作業
平成3年度　遺物実測作業
平成4年度　遺物復元作業・遺物写真撮影
平成5年度　遺構・遺物トレース作業
平成6年度　レイアウト作業・報告書刊行

遺物実測	宮田麻子・岡田依理子・矢島馨
遺物トレース・レイアウト	岡田依理子・矢島馨
遺構トレース・レイアウト	杉本淳子

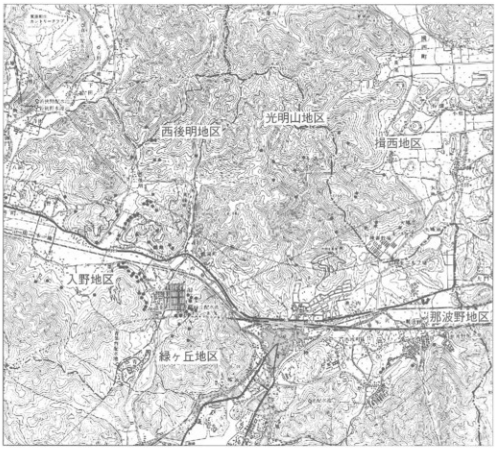
第２章　相生窯址群

第１節　相生窯址群の分布

相生窯址群は古墳時代から平安時代後期にかけての須恵器の窯跡群で、これまでに発見されている窯跡の数は135基を数え、峰相山窯跡群（姫路市）、志方窯跡群（加古川市）、東播北部窯跡群（西脇市・加東群）、末窯跡群・相野古窯跡群（三田市）とともに兵庫県を代表する窯跡群の１つである。

窯跡は相生市から龍野市にかけて広がる標高100m～250mの丘陵に分布する。窯跡はこれまでのところ約130基あまり発見されているが、開発によって消滅してしまった窯跡の数も多く、未発見の窯跡も含めれば、実際の数は200基を越えるのは確実である。この付近の丘陵は流紋岩質の火砕岩類からなる中世代の鍋亀溶結層と新生代はじめに噴出した天下台山層群及び大阪層群に相当する大陣原層群の礫層を基盤層とするが、窯跡は風化層の厚い鍋亀溶結層と大陣原層群に分布している。窯跡群は東部の那波野地区・揖西町地区・光明山地区と西部の西後明地区・入野地区の東西２つの地域に大きく分割できる。

本窯跡群での須恵器生産は東部の那波野周辺で始まる。那波野丸山窯跡群は南に張り出した小丘陵の先端部に構築されていた古墳時代の窯跡群である。平安時代の窯跡１基を含めた７基以上の窯が構築されていたようであるが、紡績工場の造成時に４基の窯跡を残して破壊された。残された４基も昭和57年の松岡秀夫による発掘調査後に消滅した。この発掘調査によって、那波野丸山窯跡群のうち、３号窯が５世紀末～６世紀初めの陶邑光明池１号窯型式の窯であることが判明している。



挿図３　相生窯址群分布図（５万分の１、方位北）

那波野地区周辺での須恵器生産は6世紀末まで継続して行われた後、7世紀にはいると、那波野丸山窯跡群のやや北に位置する龍野市揖西町の丘陵部に生産の中心を移す。この丘陵部には、那波野土井1号窯や竹原7号窯などの存在が知られ、竹原7号窯からはかえりのある壺が出土している。

8世紀代の窯跡は龍野市と相生市の市境となる標高200m前後の尾根の稜線付近に集中する。この尾根は旧揖保郡と旧赤穂郡の郡界でもあり、須恵器生産は郡界を越えて旧赤穂郡の相生市側の光明山地区および西部の西後明地区にまで拡大する。

9世紀にはいると、東部の揖西町地区・光明山地区での須恵器生産は途絶えるが、西部の西後明地区および入野地区では、瓷器系の器を模した糸切り椀、皿類などの新しい器種の生産が始まる。生産地はやがて緑ヶ丘地区にまで拡大し、相生窯址群の最盛期を迎える。西部地区での平安期の窯址は約90基を数える。

11世紀末から12世紀前半頃になると、8世紀末で一旦途絶えていた東部の那波野地区および揖西町地区での須恵器生産が復活する。これまでに11基の平安時代後期の窯跡が発見されており、いずれも、瓦陶兼業窯の形態をとるのが特徴である。瓦の供給先は不明であるが、播磨各地の須恵器生産地では、11世紀後半から12世紀前半にかけて、平安京での造寺運動を契機として瓦陶兼業窯が一斉に出現しており、この動きと軌を一にするものと理解される。

相生窯址群から西3kmの距離にある赤穂市山田にも須恵器の窯跡がある。故松岡秀夫氏が採集した須恵器は、古墳時代、奈良時代、平安時代の3時期にわたっており、古墳時代から平安時代にかけての複数の窯跡が存在している可能性がある。この山田奥窯のさらに西2kmに位置する蟻無山古墳群から初期須恵器の出土が知られるが、近年この古墳群の麓の有年原・田中遺跡から焼け歪んだ須恵器が出土しており、同遺跡周辺に初期須恵器の窯跡が存在している可能性を示している。

第2節　緑ヶ丘落矢ヶ谷支群の分布

現在の緑ヶ丘住宅地の3丁目から4丁目付近は、かつては標高173.8mの宮山から西側に派生した野井床と呼ばれるゆるやかな丘陵地であった。この丘陵地の西には相生市若狭野町入野から岡市佐方にかけて標高150m前後の丘陵群が広がる。両丘陵群の間は南北方向に延びる谷間となり、この谷は同市青葉台付近を分水界として北の若狭野町鶴亀方面に開口する谷と佐方方面に開口する狭長な谷に分かれる。須恵器窯跡群はこの分水界より北側に分布し、相生湾に面した南側の丘陵部には展開しない。

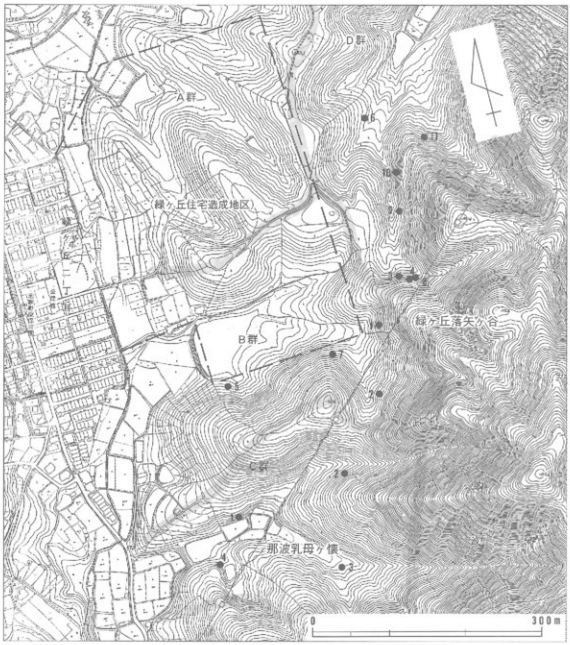
緑ヶ丘周辺に分布する須恵器窯跡群は、西側の「ちゃわん山」の山麓に分布する窯跡群と東側の宮山から派生した丘陵群の谷部に分布する東西2つの支群に分かれ、前者を緑ヶ丘一の谷支群、後者を落矢ヶ谷支群と呼んでいる。このうち山陽自動車道関連で調査を実施したのは落矢ヶ谷支群の10基である。落矢ヶ谷支群では現在までのところ15基の須恵器窯跡が発見されているが、これらの窯跡はいずれも谷の奥部に立地しており、平野部に近いところに分布した窯跡は、緑ヶ丘住宅地建設の際に相当数が破壊されており、実態は不明である。落矢ヶ谷支群を構成する窯跡群について、立地する谷を中心にグルーピングすると、およそ次の4つのグループに分けることができる。

A群　鶴亀方面に開析する主谷の開口部付近に位置する。相当数の須恵器の窯跡が存在していたようであるが、住宅地造成により未調査のまま消滅している。未開発の丘陵部周辺の水田に須恵器の散布が認められることから、若干数の窯跡が残存している可能性があるが、実態については不明である。

B群　A群の南の支谷に分布する群。落矢ヶ谷1号窯・2号窯・5号窯・7号窯が分布するが、北側の谷部に分布した窯跡は造成により破壊され、実態は不明である。落矢ヶ谷1号窯・2号窯・7号窯は山陽自動車道関連で発掘調査を実施している。

C群　最も南の支谷に分布する群である。相生窯址群中においても、最南端に位置する群で、乳母ヶ懐1号窯～4号窯の4基が発見されている（うち1基は窯の位置不明）。乳母ヶ懐3号窯は山陽自動車道関連で発掘調査を実施し、今回の報告書に調査結果を報告している。

D群　A群～C群が北の若狭野町鶴亀方向に延びる主谷に開析する小谷群に分布するのに対して、D群は、同市竜線町方面に開口する狭長な谷の斜面部に立地する。落矢ヶ谷3号窯・4号窯・6号窯・8号窯～11号窯の8基が分布するが、遺物の散布状況から判断してもう少し数が増えそうである。山陽自動車道関連で6号窯を除く7基の発掘調査を実施し、9号窯～11号窯の調査成果については今回の報告書に記載している。



挿図4　緑ヶ丘落矢支群分布図

相生窯址群関係文献一覧

鈴木豊彦「兵庫県相生市緑ヶ丘窯址調査について」『相生市史資料編』第10集　1966年

吉田昇・種定淳介「大降原古窯址群」『昭和55年度兵庫県埋蔵文化財調査年報』1980年　兵庫県教育委員会

宮崎雅美「兵庫県相生市若狭野町緑ヶ丘窯跡群の遺物について」『土盛』11　1980年　京都産業大学考古学部

那波鳳翔『やきもの師の眼』1980年

松岡秀夫・河原隆彦他『相生市入野窯跡発掘調査報告書』1981年　相生市教育委員会

那波鳳翔「播州相生の窯址」『月刊　陶』JUL-7　№12　1981年

森内秀造「兵庫県相生古窯址群について」『日本史論叢』第10輯　1983年

松岡秀夫・河原隆彦・鈴木豊彦『相生市若狭野東部地区区画整理事業に伴う埋蔵文化財（西後明古窯跡群）発掘調査略報』　1984年　相生市教育委員会

松岡秀夫・河原隆彦他『緑ヶ丘一の谷２号窯跡発掘調査報告書』1984年　相生市教育委員会

森内秀造「相生の古代窯業」『相生市史』第１巻　1984年

松本正信「龍野市とその周辺の考古資料」『龍野市史』第４巻　1984年

松岡秀夫・河原隆彦・石塚太喜三・竹本敬市『相生市西後明窯跡群発掘調査略報（そのⅡ）1985年　相生市教育委員会

松岡秀夫「那波野丸山窯跡」『兵庫県埋蔵文化財年報　昭和57年度』1985年　兵庫県教育委員会

松岡秀夫「構谷２号窯跡」『兵庫県埋蔵文化財年報　昭和57年度』1985年　兵庫県教育委員会

西口和彦・森内秀造　『相生市・緑ヶ丘窯址群』1986年　兵庫県教育委員会

森内秀造「平安時代の窯業生産－播磨地方の須恵器生産を中心に－」『北山茂夫追悼論集　歴史における政治と民衆』1986年

河原隆彦「西後明古窯跡群」『兵庫県埋蔵文化財年報　昭和59年度』1987年　兵庫県教育委員会

森内秀造「窯跡資料」『相生市史』第５巻　1989年

河井孝幸・河原隆彦　『光明山古窯跡』1991年　相生市教育委員会

河原隆彦・河井孝幸・石塚太喜三「那波野丸山窯跡」『兵庫県史』1992年

森内秀造・永井信弘・池田征弘他「播磨を中心とした律令期須恵器の検討会資料」（謄写版）1993年

森内秀造・永井信弘「播磨とその周辺の須恵器」『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東２須恵器－』1993年　古代の土器研究会

〔その他〕

大村敬通・伊藤晃「山陽地方の古代・中世窯」『日本やきもの集成９　山陽』1981年

松岡秀夫「赤穂市の考古遺跡と遺物　(35)山田奥窯跡」『赤穂市史』第４巻　1984年

森内秀造「平安時代」『発掘がかたる兵庫の歴史－10年の成果』所収　1986年

上月昭信「播磨における須恵器の生産」『鹿児』100 号　加古川史学会・加古川地方の地名を考える会　1984年

上月昭信「播磨地方における須恵器窯址の概観」『玉岡松一郎先生古稀記念論集』1984年

森内秀造「緑ヶ丘窯跡群」『兵庫県史』所収　1992年

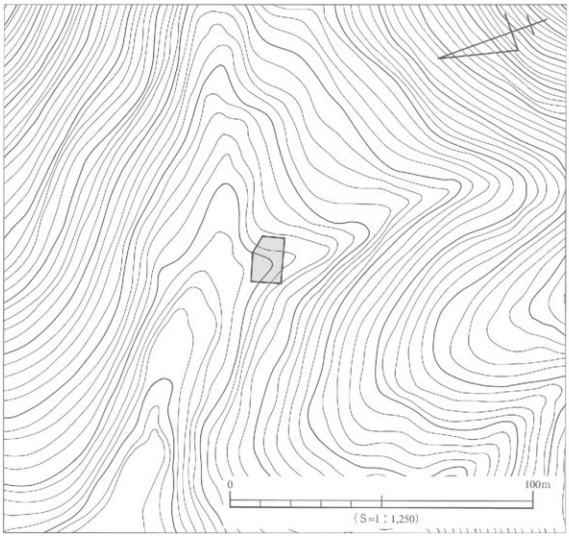
第３章　発掘調査の成果

第１節　乳母ヶ懐３号窯

１．窯の立地と構造

那波乳母ヶ懐支群は相生窯跡群の分布域の中で最も南に位置する支群で、西に開口する支谷に４基（うち１基は散布のみで、窯の位置不明）の窯跡が存在する。乳母ヶ懐３号窯は乳母ヶ懐支群の中で最も谷の最奥部に位置する窯で、東西方向に延びる支谷とこの支谷から枝別れして南に延びる小支谷の分岐点付近の傾斜度19°前後の緩斜面に構築されている。標高は焚口で45.0mを測り、谷基底部との比高差はわずか0.5mである。

窯体の右側斜面は小さな凹状地形を呈しているため、窯体部周辺部は馬の背状の小さな高まり状地形となっている。右側斜面の凹状地形は自然地形か人為的な掘り下げによるものかは即断できないが、自然の凹状地形であったとしても、排水および作業スペース・窯体の盛土利用のために多少とも人為的な掘削が行なわれているものと判断される。

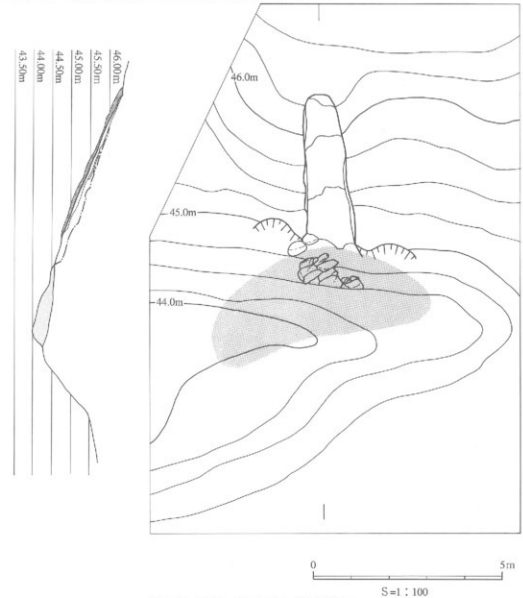


挿図５　乳母ヶ懐３号窯　調査位置図

窯体長4.2m、床幅は窯体先端部（A－A'ライン）で0.88m、焼成部中央（B－B'ライン）で0.96m、焚口部で（C－C'ライン）で1.18mを測る。焚口で最大床幅を測り、焚口から奥に向かってすぼまる砲弾形の平面プランをもつ。側壁の残存高はもっとも残りのよい焚口で0.1mしかなく、窯体架構部のほとんどを地上に構築した地上式の窯である。燃焼部と焼成部との間には傾斜変換点はなく、焚口から窯体先端部までほぼ直線的に立ち上がる。床面の傾斜角度は23°である。

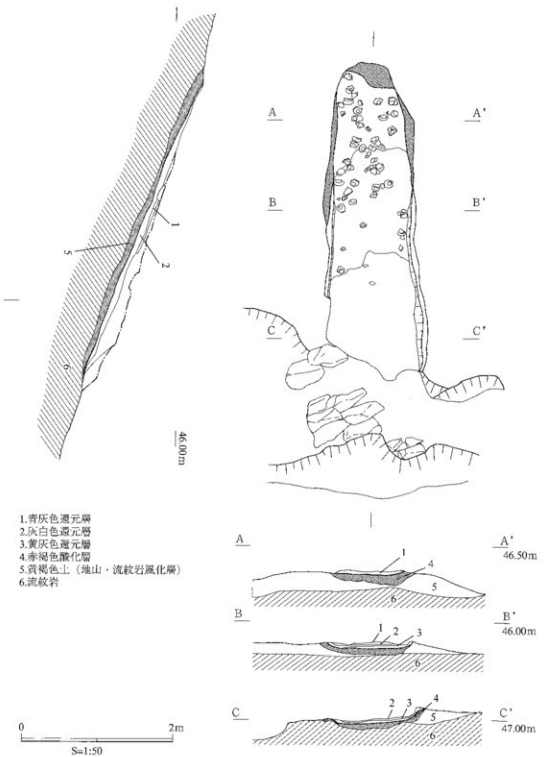
燃焼部と焼成部との間には傾斜変換点がないので、両者の境は不明瞭であるが、焚口から1.5m奥にはいった付近の床面にわずかな段差があり、また、この段差を境に焼成台転用の遺物がほとんど認められないことから、燃焼部は焚口から奥行き1.5mの範囲と判断される。

焼成部床面には、椀類を中心とした遺物が約30個体残存していた。いずれも破損品で、伏せた状態で置かれており、焼台に転用されたものである。遺物は窯体先端の排煙部付近まで認められる。焼成部中央部付近の床面は平滑で、遺元層の枚数が1枚多く、粘土で床面を被覆している可能性があるが、中央部より先端部にかけての床面は、素掘りのままで、粘土による被覆の形跡はない。このため、地山の岩石類が露頭し、床面の凹凸が激しい。排煙部の形状について窺い知れる痕跡は残されていないが、排煙部から続く上方の斜面の延長約1mが平坦部となっている。



挿図6　乳母ヶ懐3号窯　地形測量図

前庭部の延長は0.5m～0.6mしかないが、焚口の左右両横をわずかに掘り下げて、通り道程度の作業スペースを確保している。灰原は谷の流路内に形成されており、長径約６m、短径約２mの長楕円形状に広がる。灰層の厚さは最も深い所で0.4mあり、灰原の上面の高さは焚口とほぼ同じ高さである。出土遺物量は遺物コンテナ58箱を数える。



挿図７　乳母ヶ懐３号窯　窯体実測図

2．遺物

椀C

椀C１（*1～86*）

高さ３㎜前後の回転糸切りの平高台をもつ。ロクロの回転方向は右回りである。器壁の厚さは２㎜と極めて薄く、体部は湾曲して立ち上がり、口縁部を外反させるのが特徴である。高台の高さは５㎜前後で、ヘラによる高台側面の整形は認められない。口径は12cm～14cm代（*1～19*）、15cm～17cm（*20～61*）、17cm～19cm（*62～86*）の３つに大別できる。

椀C２（*93*）

体部下半に沈線を巡らせる。底部を欠くが、10号窯の*521～524*と同じく糸切りの平高台をもつもの思われる。

突帯椀（*87～100*）

口縁端部を外反させ、体部中央に断面台形もしくは三角形の突帯を巡らせる。底部の形態は糸切り底に外方へ踏ん張る輪高台を付すａタイプのもの（*87・88・95～100*）と89のように10号窯の*527・529・530*と同じく底部縁辺に幅８㎜前後の溝を巡らせて輪高台風に見せたｂタイプのものがある。また、口径は15cm～17cm代のもの（*87・91・93・94*）と18cm以上のもの（*89・90・92*）のほかに、*88*のように口径24cmにも達するものもある。

台付皿（*101～117*）

回転糸切りの平高台をもつ。口径12cm～15cm。体部はやや直線的に開き、口縁端部を外方に捻る。ロクロの回転方向は椀Ｃと同じく右回りである。体部内外面ともナデ仕上げである。高台の高さは５㎜前後で、側面をヘラ状工具で整形している。

耳皿（*118*）

１点だけ出土している。口縁部を欠くが、体部の左右側面が内側に折り曲げられており、底部は糸切りの平高台を有する。高台径3.5cm。

皿Ａ（*119～121*）

口径16cm～18cm、器高１cm前後の浅い皿形の器で、底部にヘラ削りが施されている。いずれも底部中央部を欠いており、高台の有無については不明である。落矢ヶ谷２号窯・同４号窯でも浅い皿形の製品が出土しているが、底部はヘラ切り不調整である。なお、*119*の口縁部外面には重ね焼の痕跡を示す帯状の黒色の発色がある。

杯Ａ（*122～146*）

口径12cm～14cm、底部径12cm～14cm、器高3.0cm～3.7cm。体部と底部の境は丸く、口縁部をわずかに外反させる。底部外面にはヘラ切り痕が残るが、ヘラ切りによって生じた段を板状工具によって整形している。

双耳壺（*147～155*）

倒卵形の体部に２本の貼り付けの突帯と左右２つの耳をもつのを基本的形態とする。左右の耳は板状にした粘土紐の上端部を壺体部に接着した後、下端部を２本の指で両横から挟み込むようにして押さえながら壺体部に接着してい

突帯椀*89*　底部外面

る。口縁部を大きく外反させ、端部を上方につまみ上げる。152と155の体部は外面に平行叩き、内面に同心円のあて具痕を残すが、153と154の体部には叩きの痕跡は認められない。154の体部の器壁は4㎜前後と非常に薄いが、体部の凹凸が激しい。150と151の肩部に沈線状のものが見えるが、ともに小片であり、意図的に引かれた沈線かどうかは不明である。155の頸部には2本の貼り付けの突帯を巡らす。突帯周辺はヘラ状工具で整形されており、特に上位の突帯と口縁部との間には整形による段ができている。

底部は平底で、粘土塊を円盤状の粘土板にして底部を形作っている。152の底部外面には、掌紋が残されており、両方の掌で挟んで粘土塊を円盤状の粘土板にしたことがわかる。また、152～154のいずれも底部外面の周縁部には幅2㎝前後のヘラの回転痕が残る。ヘラの回転は中心部には及んでいないので、整形のためのヘラ削りではなく、底部縁辺にヘラを差し入れて回転させ、製品をロクロ台から取り外した痕跡と考えられる。このような底部痕跡は、鉢D、壺Aに共通して認められる。

鉢D（156～171）

体部は底部から湾曲しながら立ち上がり、口縁部を「く」の状に大きく外反させる。口縁端部は丸く収める。体部外面はヘラ状工具で整形している。器高が低いもの（156～163）と高いもの（164～167）がある。底部は平高台を有し、高台側面はヘラ状工具で整形されている。158の高台貼面にはヘラ状工具使用の痕跡が観察できる。底部外面には糸切りのもの（156～163）と糸切り痕を有しないもの（164）がある。後者は双耳壺と同様の底部形態で、周縁にはヘラの回転の痕が認められる。156の底部内面には底部径7.2㎝の器物が置かれていた痕跡が残されている。

鉢A（172～176）

いわゆる鉄鉢形の鉢である。相生窯址群における当該期の窯では鉄鉢形の鉢の出土例はなく、本例が唯一の出土資料である。172・174のように口縁部を内傾に大きく傾けるものと173・175・176のようにあまり大きく内傾しないものがある。前者は口縁端部を丸く収めるのに対して後者は口縁端面が平坦でやや肥厚気味である。底部を欠く。体部外面はナデ調整が施されている。

壺底部（177～181）

177～179はいずれも底部に糸切り痕を残すが、177が静止糸切り、178・179は回転糸切りである。上部を欠いており、壺・鉢のいずれの底部かは判断できない。

180・181の底部はは鉢Dや壺Aと同様の粘土塊を円盤状にした平高台で、底部外面の縁辺には双耳壺と同様のヘラの回転の痕が残されている。

壺A（182～189）

口径は13㎝前後で、体部上位に最大径があり、体部中央から底部にかけて急速に窄まる。187と189は2本の貼り付けの突帯をもつ。185・186・188は体部外面に平行叩きの痕跡が残されているが、内面のあて具痕は判然としない。底部は粘土塊を円盤状にして平高台にしたもので、底部の周縁には双耳壺や鉢D164と同様のヘラの回転痕が残されている。188は降灰の状況から口縁部を上にして窯詰めされたと判断されるのに対して、185・186は底部全体に降灰が認められるが、口縁端部には降灰がないので、底部を上にして窯詰めされたものと判断される。

手付瓶（190～203）

瓷器写しの瓶である。頸部はやや直上方向に立ち上がり、口縁部は大きく外反する。200は第17図では口縁部に注ぎ口が設けられているように見えるが、焼成中に生じた歪みよるものであろう。また、200は把手の対面部が欠損しており、欠損部に203形態のような注口が設けられている可能性もある。体部

は倒卵形を呈するが、体部中央に最大径をもつもの（199）と体部下位に最大径をもつもの（195・200）がある。体部上半には2条を単位とした3筋の沈線を巡らすのを基本とするが、沈線をもたないもの（192）も存在する。底部はいずれも糸切りの平高台である。

把手は200・202のように2本の粘土紐を組み合わせたもので、上端部を頸部に下端部を体部上位に接着している。201は粘土紐を板状にして両端を鉤形に曲げたもので、手付瓶の把手になるかどうかは不明である。

壺L（204・205）

倒卵形の体部に大きく開く口縁部をもつ。底部は糸切りの平高台を有する。

蓋（207・208）

207の天井部はヘラ切りのままで調整を行なっていない。207は口縁部外面に黒色に発色した帯状の重ね焼の跡が残されているので、蓋以外の器種の可能性もある。208は口縁部が内反りになっており、11号窯出土の壺蓋675と同様の蓋形態になろう。

高杯（209）

相生窯址群における当該期の窯では高杯の出土例はこれまで皆無であり、本例が唯一の資料である。但し、209は皿部・脚部先端部を欠いており、全体を復元するには至っていない。

硯（213）

いわゆる風字硯である。破片は硯頭と左端方の鋒縁部と硯尻部との3片のみである。硯の形態から判断して硯背後方に2脚存在すると思われるが、この部位の破片を欠く。硯頭は丸く弧を描き、縁帯の高さは硯頭で4.0cm、硯尻で1.8cmで、硯頭部の高さが高くなっており、硯背部分に脚を設けて前頭部に硯水を溜める工夫を凝らしている。各縁帯の下半部はいずれもヘラ削りを施して調整している。

甕その他（206・210～212・214）

206は径9.8cm、高さ1.8cmの輪状高台を有するが、上部の形状については不明である。

210～212は端部を奈良時代の杯Bの蓋のように「く」の字状に屈曲させ、体部はふくらみをもつ。高杯の脚台部の可能性も考えたが、通常の高杯とは脚台部の反りが逆であるのでその可能性は低いと考える。

214は甕の口縁部であろう。口径18.0cmで、口縁端部は内側に突出する。本窯では甕の生産は極めて少ないのが特徴である。

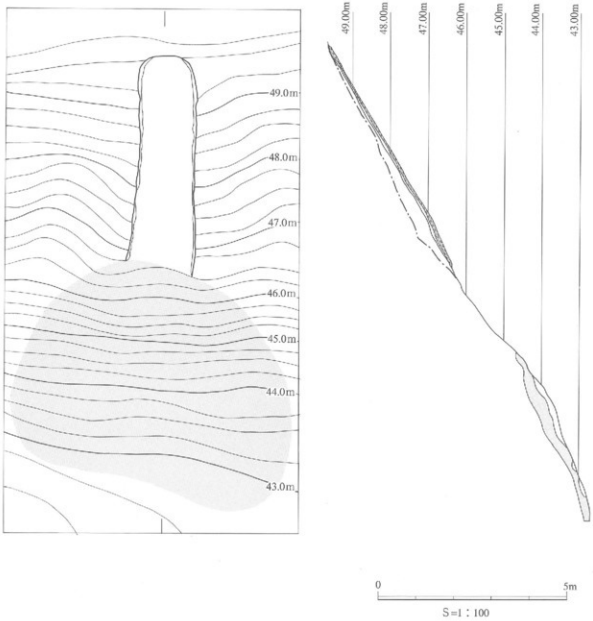
第2節　緑ヶ丘落矢ヶ谷9号窯

1．窯の立地と構造

北に開口する谷の東斜面に構築されている。約70m東に10号窯が位置している。窯体主軸の方位はN－23°－Eである。

本窯が立地する斜面は比較的起伏が少ないが、窯体の左右の斜面は掘り下げられて凹状地形を呈している。特に左側斜面が窯体中位ラインから焚口ライン付近にかけて、大きく掘り下げられて作業場スペース的な空間を作り出している。この箇所から遺物コンテナ2箱程度の遺物が出土している。また、右側斜面からは左側斜面ほどではないが、ナイロン袋1袋分程度の遺物が出土している。

窯体は第1次窯体と第2次窯体があり、第2次窯体は第1次窯体部の焼成部中央から焚口部を嵩上げして再構築されている。



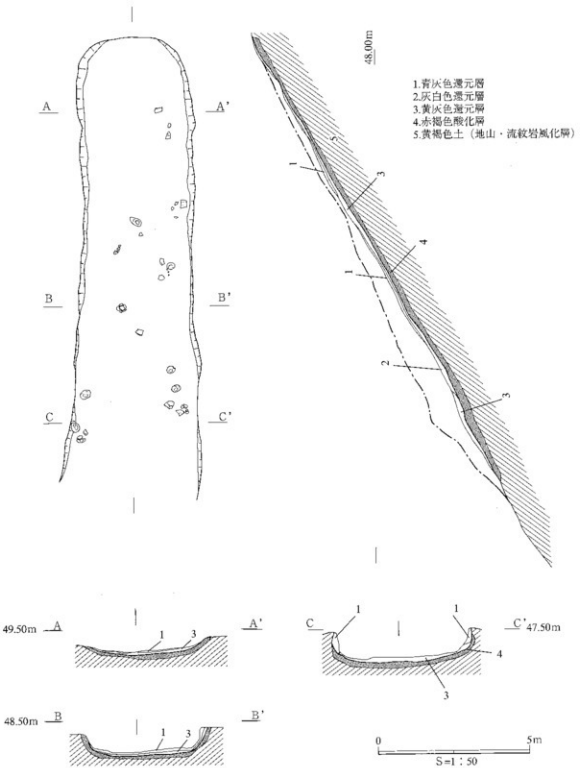
挿図8　緑ヶ丘落矢ヶ谷9号窯　地形測量図

第１次窯体

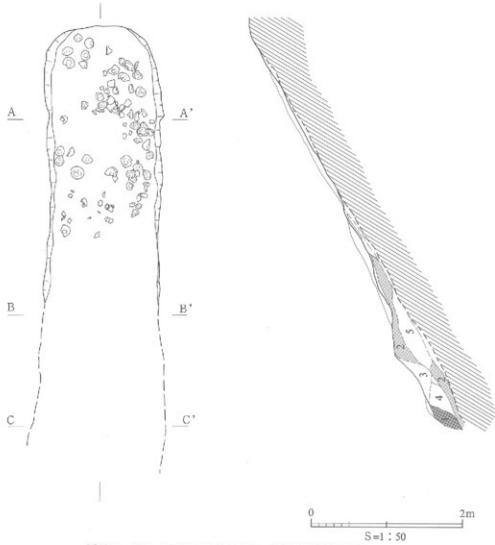
操業当初の窯体である。標高は焚口部で46.5mを測り、谷基底部からの比高差は約４mである。

全長6.76m、床幅は窯体先端部（A－A'ライン）で1.36m、焼成部中央（B－B'ライン）で1.47m、焚口部で（C－C'ライン）で1.64mを測り、床面の平面形態は焼成部から排煙口まで幅がほぼ一定な寸胴形を呈する。

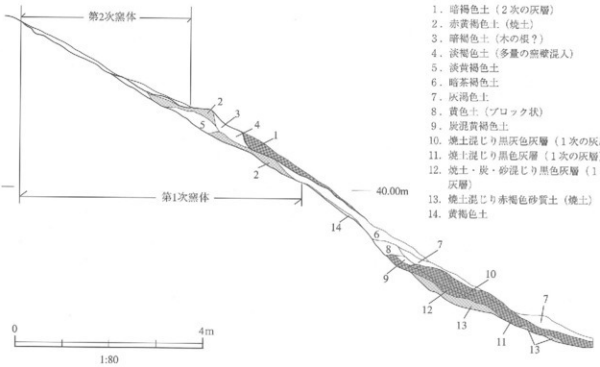
地山の掘り込みは焚口が最も深く、上方に行くほどその深さを減じており、側壁の残存高は焚口部の



挿図９　緑ヶ丘落矢ヶ谷９号窯　第１次窯体実測図



挿図10　緑ヶ丘落矢ヶ谷９号窯　第２次窯体実測図



挿図11　緑ヶ丘落矢ヶ谷９号窯　窯体・灰原縦断面図

C－C'ラインで0.3m、焼成部中央のB－B'ライン付近で0.25mを測るが、窯体先端部のA－A'ライン付近では側壁はほとんど残存していない。

床面の平均の傾斜角度は29°で、燃焼部と焼成部との間には傾斜変換点はなく、焚口から排煙部までほぼ直線的に立ち上がる。床面には粘土による被覆は認められず、素掘りのままで、地山に含まれる礫が露頭し、面は平滑ではない。

燃焼部の床面は水平ではなく傾斜をもち、上述の通り、焼成部との間には傾斜変換点をもたないので、焼成部との区分は明確ではないが、燃焼部の範囲は床面の遺元度の違いから焚口よりおよそ1.2mほど奥に入った付近までであろう。焚口の左側壁は右側壁よりも0.2mほど短く、やや外側に開く。

焼成部の長さは4.60mで、焼成部中央から焚口にかけての床面は若干の遺物が残存していた。遺物は焚口から0.7m～0.8m奥に入った左右の壁際と焼成部中央付近に若干の遺物が残されていた。いずれも歪みが大きく、実測図化できるものは限られている。

窯体先端は焼成部からほぼ同じ幅を保ったまま終結する。窯体外の被熱層の広がりはほとんどなく、11号窯のように上方の斜面に沿って長く延びない。

灰原は焚口より約3m下方から谷基底部にかけて扇形に広がる。灰層の厚さは最も厚い所で約0.5mである。最下層には焼土が堆積している。出土遺物量は窯体出土のものを含めて30箱である。

第2次窯体

第1次窯体の床面直上には淡黄褐色土（第5層）を挟んで上下に赤褐色酸化土（第2層）が堆積している。この淡黄褐色土および赤褐色酸化土はともに第1次窯体架構部の崩落土と思われ、第2次窯体はこの崩落土をベースとしてテラス状の平坦地を設けている。淡黄褐色土および赤褐色酸化土の上には暗茶褐色土（第6層）が窯体外の斜面上に堆積しており、第2次窯体の灰原のベース面となっている。暗茶褐色土層の下層には第1次窯体の灰層の広がりが認められ、暗茶褐色土層が第1次窯体と第2次窯体を区分する間層となっている。暗茶褐色土層の厚さは15cm前後で、斜面上の延長は3.5 mに及び自然堆積によるものか人為的なものかは不明であるが、第1次窯体の崩落土の下に堆積している点から自然堆積であっても長期におよぶものではないと判断される。遺物についても形態・技法的特徴など型式差を生むほどの時間差は認めがたい。

第2次窯体は第1次窯体の焚口から焼成部中央にかけての部位を嵩上げして再構築されたもので、全長は4.40mで、第1次窯体より2.46m縮小している。側壁の残存高はほとんどなく、架構部の大半を地上に露出させた完全な地上式の窯である。

焚口幅は1.50mで、燃焼部は奥行き0.95mある。第1次窯体の焚口から焼成部中央にかけての部位を嵩上げし、焼成部中央より上位の第1次の窯体をそのまま再使用しているため、燃焼部の傾斜角度はゆるやかになり、焼成部との間にわずかな傾斜変換点ができている。

焼成部の長さは3.45mで、第1次窯体時より約1m縮小している。第1次の床面をわずかに被覆しており、焼成部床面には多数の遺物が残存していた。いずれも椀・杯類で天地を逆にして置かれており、大半が焼台に転用されたもので、排煙部付近まで認められる。

焚口からテラス状の前庭部が続く。前庭部の延長は0.6mあるが、灰原は前庭部の終点から0.6mの距離をおいて始まっており、本来の前庭部の延長は1m余りあったものと思われる。灰原の延長は約3mで、裾部までは達していない。灰層の厚さは最も厚いところで、15cm程度である。

2．遺物

椀C（*301*～*358*）

底部は回転糸切り。底径に対して口径比が大きい。口縁部を外反させるが、*308*・*312*のように口縁端部を外側にさらに捻り返すものも多く含まれる。高台の高さは5㎜前後で、ヘラによる高台側面の整形は行われていない。口径14㎝～17㎝の一群（*305*～*341*）と口径17㎝（*342*～*358*）以上の一群の大きく2群に分かれるが、*301*～*304*のように口径14㎝以下の小型のものも少量存在する。

突帯椀（*359*～*366*）

体部下半に1条の突帯を持つ。底部は糸切り底に輪状高台を付すもので、付高台は外側に高く踏ん張る。

台付皿（*367*～*374*）

いずれも糸切りの平高台をもつ皿である。体部はほとんど直線的に立ち上がり、水平に開く。

杯A（*375*～*408*）

底部ヘラ切り不調整。口径は12.8㎝～14.6㎝であるが、*407*のように口径15.9㎝の大振りのものもごく少数ある。また、器高は2.8㎝～4.2㎝であるが、*376*・*381*・*382*のように口径に比して器高のやや高いものもある。体部は底部からほぼ直線的に立ち上がるが、*375*・*379*・*388*・*391*・*401*のように体部が湾曲し、口縁部が外側に捻り返されているものものある。底部と体部の境が丸く、境界が不明瞭なものが多いが、*376*・*378*・*382*・*407*他のように底部と体部の境が明瞭なものもある。

皿（*409*～*410*）

口径に対して器高が低く、体部は外反し、口縁端部を外方に薄く引き出すのが特徴である。

鉢D（*411*～*418*）

口頸部がくの字状に屈曲する鉢の一群であるが、体部下半を欠いており、全体の形状を知り得るものはない。このうち、*411*・*414*・*415*は乳母ヶ懐3号窯および落矢ヶ谷11号窯と同形態の鉢Dになろう。*416*・*417*については壺の底部の可能性もある。

双耳壺（*427*～*429*）

頸部から口縁にかけてハの字形に開く。口縁端部を上方につまみ上げ外側に外反させる。*427*・*429*ともに体部外面に叩きの痕跡が残るが、内面のあて具痕は確認できない。*427*・*429*は耳が剥落しているが、その痕跡から平面Y字形もしくは三角形状の耳の形態であることがわかる。

壺（*419*～*421*）

*421*は倒卵形の体部に外反する頸部をもつ。下半部を欠くが、乳母ヶ懐3号窯の*205*と同形態になろう。*419*は体部を、*420*は口頸部を欠いており、形状は不明である。

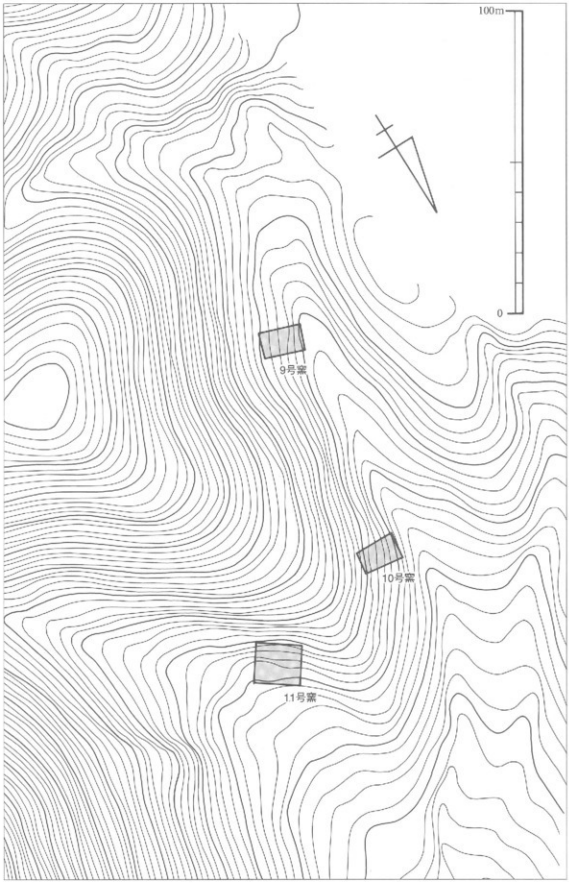
硯（*431*・*432*）

*431*は左硯尻部の破片である。縁帯の高さは1.8㎝あり、内外面にヘラ削りを施して整形している。

*432*は硯頭部の破片で、還元化しておらず土師質の赤黄褐色を呈する。硯頭は丸く湾曲する。縁帯は硯頭では指押さえのみであるが、側縁部については内外面ともヘラ削りを行なって仕上げている。

甕（*430*・*433*・*434*）

口縁端部を上方につまみあげている。体部外面には平行叩きを施している。頸部にも叩きの痕跡が残るが、ナデ消している。内面も同心円叩きの痕跡が残るが、外面と同様ナデ消されている。



挿図12　緑ヶ丘落矢ヶ谷９号窯～11号窯　調査位置図

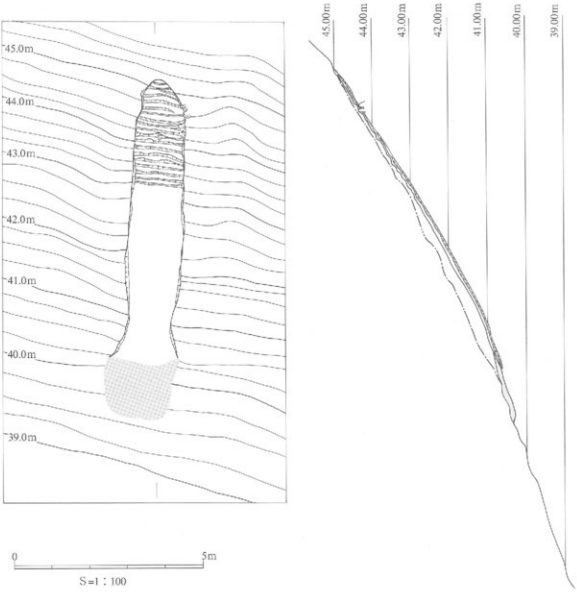
第3節　緑ヶ丘落矢ヶ谷10号窯

1．窯の立地と構造

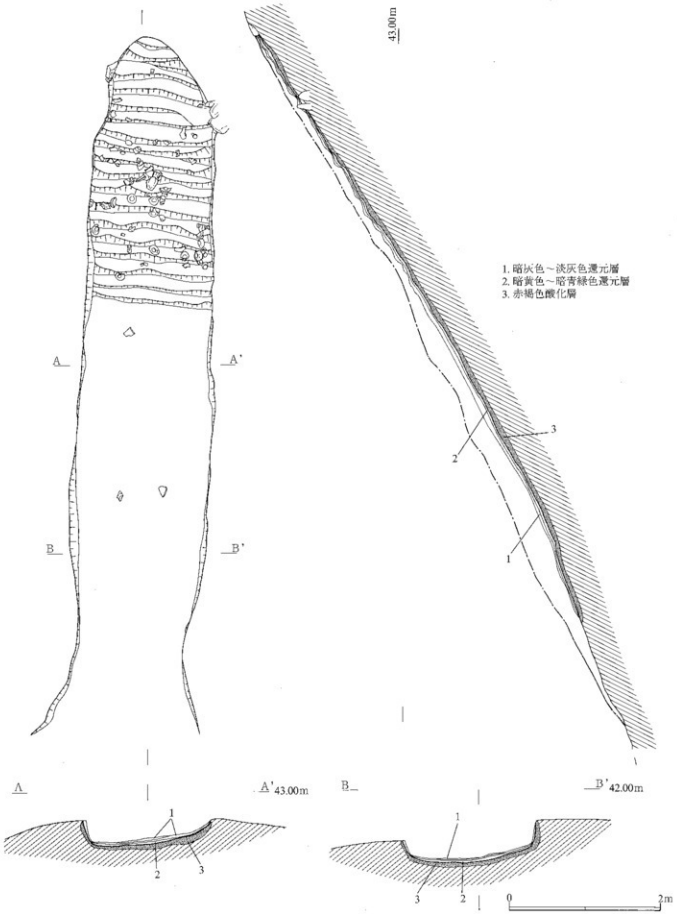
9号窯と同じ北に開口する谷の東斜面に構築されており、標高は焚口で41mを測り、谷基底部からの比高差は5～6mである。窯体主軸の方位はN－23°－Eである。

全長9.10m、床幅は焚口で1.20m、燃焼部で（B－B′ライン）で1.30m、焼成1.30m、焼成部先端で1.27mを測る。窯体は排煙口手前まではほとんど床幅が変わらない寸胴形の平面プランを呈するが、排煙口付近は床幅が急速に狭まって終結する。

地山の掘り込みは燃焼部付近が最も深く、上方に行くほどその深さを減じており、側壁の残存高は燃焼部で0.25m、焼成部中央で0.20m、先端部で0.10mである。窯体の左右の斜面はわずかに掘り下げられて凹状地形を呈しており、窯体部と左右の斜面は約0.5mの高低差がある。



挿図13　緑ヶ丘落矢ヶ谷10号窯　地形測量図



挿図14　緑ヶ丘落矢ヶ谷10号窯　窯体実測図

燃焼部と焼成部の境を示す明確な傾斜変換点はないが、わずかに残された灰の広がりから燃焼部は焚口からおよそ１ｍ奥に入った付近より手前側がその範囲であろう。燃焼部幅が1.30ｍであるのに対して、焚口幅は1.20ｍで、焚口を絞り込んでいる。焚口より手前側はハの字状に掘り込まれており、底面には灰が堆積していた。焚口手前の掘り込みの側面・底面とも酸化・還元の痕跡はなく、窯体外の前庭部の役割を果たしていたと考えてよい。

焼成部は焼成部中央1.30ｍ、焼成部先端で1.27ｍを測る。焼成部中央より窯体先端部（排煙口）まで階段状の段が設けられている。段は18段あり、各ステップの幅は10cm～15cm、段の高さはおよそ0.15ｍある。焼成部中央より下位の床面にはほとんど遺物は残存していなかったが、上位の有段部には底部を上にした椀類が残存していた。床面は素掘りで粘土による被覆は行なわれていない。床面の傾斜角度は焼成部で下位で29°、上位で36°を測り、平均の傾斜角度は30°である。

明瞭な灰原は形成されておらず、焚口前庭部にのみ灰層の厚さ0.2ｍほどの堆積が認められ、出土遺物量は窯体部出土のものを含めてわずか10箱である。

２．遺物

椀Ｃ

椀Ｃ１（*501*～*520*）

回転糸切りの平高台をもつ。体部は湾曲して立ち上がり、口縁端部は外反せず丸く収める。高台の高さは0.6cm～0.8cmで、側面をヘラ状工具で削って整形しており、このため側面は内側に切れ込み、高台断面は台形状を呈するのが特徴である。口径は12cm～14cmの一群（*501*～*508*）と15cm～16cmの一群（*509*～*520*）の大きく２種に分けることができる。

椀Ｃ２（*521*～*524*）

体部に沈線をもつタイプを椀Ｃ２とする。基本形態は椀Ｃ１と変わらないが、口径は17cm～19cmと椀Ｃ１に比べて大振りである。

突帯椀（*525*～*535*・*554*）

口径18.7cm～21.6cm。体部中央に断面台形もしくは三角形の突帯をもつ。底部の形態は糸切り底に輪高台を付すａタイプの一群（*525*・*533*～*535*）と底部縁辺に沿って幅５mm前後の溝を掘って輪高台風に仕上げているｂタイプの一群（*527*・*529*・*530*）がある。ａタイプの輪高台は高く外方に踏ん張るのが特徴である。また、ｂタイプの突帯椀は乳母ヶ懐３号窯からも出土（第３図　*89*）している。

口縁はわずかに外反させるが、*525*・*531*・*554*のように外側に短く捻り返すものや*532*のように口縁端面を平坦に仕上げるものもある。なお、*554*は体部の立ち上がりの角度と内湾する口縁の形態から、蕎矢ヶ谷３号窯（既報告）出土例と同形態の鉢の可能性もあるが、ここでは焼成中の体部の歪みを考慮して突帯椀に分類しておく。

台付皿（*536*～*545*）

口径14.3cm～15cm、底径2.8cm～3.1cm。体部は湾曲して立ち上がり、口縁端部をわずかに捻り返す。高台は回転糸切りの平高台で、高台側面はヘラで整形されており、椀と同じく高台の断面は台形状を呈する。

杯Ａ（*546*～*553*）

口径13.1cm～13.6cm、底径2.7cm～3.7cm、器高6.6cm～7.6cm。底部はヘラ切り後、板状工具でナデ調

整を行っている。体部内面はナデによる仕上げが行なわれているが、外面は凹凸が激しく、段状になっている。

壺L（555・556）

555・556ともに上半部を欠くが、体部上位から底部にかけて急速に窄まる形態をもつ。555と556の底部は双耳壺の底部と同じく粘土塊を円盤状にして形作られたもので、底部外面周縁部にヘラの回転痕が残されている。体部下半の形態は若干異なるが、口頸部は乳母ヶ懐3号窯205の形態になるものと思われる。なお、567は一応双耳壺の口縁部に分類しているが、この壺L形態の口頸部になる可能性もある。

壺A（558・559）

口縁端部が短く直立する壺で、口縁のみで全体の形状は不明である。当該期の壺Aの底部は乳母ヶ懐3号窯出土資料185・188のように糸切りの平高台を有するのが基本的な形態であるが、落矢ヶ谷3号窯（既報告）のように輪高台を有する壺Aの出土例もあるので、558も壺Aの底部と考えておきたい。

塔片（560・561）

中心部に円孔を有する笠形を呈する器形である。560と561は同一個体と思われ、561は560の縁部の破片であろう。560は中央部に円孔が穿たれ、円孔の周囲には1㎝の高さの立ち上がりがあり、平坦な頂部が続く。体部は平坦な頂部から笠形に開き、体部には幅2㎝前後の粘土帯を張りつける。粘土帯の表面はヘラで整形されており、粘土帯の数は推定で10本ある。体部内面にはヘラによる調整痕が残されている。561は体部外面に叩きの跡を残す。外面に粘土帯を張りつけており、先端をL字状に削り出している。形状はいわゆる瓦塔とは異なるが、中心部に円孔と平坦面を有し、重ね積みできる工夫が凝らされているので、一応、塔片と考えておく。赤穂市有年考古館に同様の破片がある。相生市西後明出土として記録されており、表面に蓮華文らしきヘラ描き文様が施されている。（『有年考古館蔵品図録』1991年）

双耳壺（564～578・557）

口縁部から底部まで全体が復元できたものはなかった。口縁部は端部が上方につまみ上げられているもの（564・567）と下端部が下方に引き出されているもの（565・566）がある。頸部に乳母ヶ懐3号窯155と同じく上下2本の突帯を巡らしているもの（568）がある。体部には上下2本の突帯を巡らす。体部の耳は他窯例と同じく板状にした粘土紐の両側面を指で挟んで体部に接着させている。570・573・574・578の体部は外面に平行叩きの痕を残す。578は内面に明瞭な同心円の当て具痕を残すが、574の当て具痕はかすかに残るのみ、他は表面的には当て具痕が全く観察できない。底部は平底で、乳母ヶ懐3号窯の双耳壺や鉢と同様、粘土塊を円盤状にして底部を形作っており、いずれも底部外面の周縁部にはヘラの回転痕が残る。577は底部全体をヘラ削りしており、578は底部外面に刺痕を残す。

甑（579・580）

580の底部は図化していないが、底部の孔部の一部が残されている。579は体部外面に平行叩き、内面に同心円のあて具痕を残す。体部には1条の沈線を巡らす。580は底部周囲の側面にヘラ削りを施している。

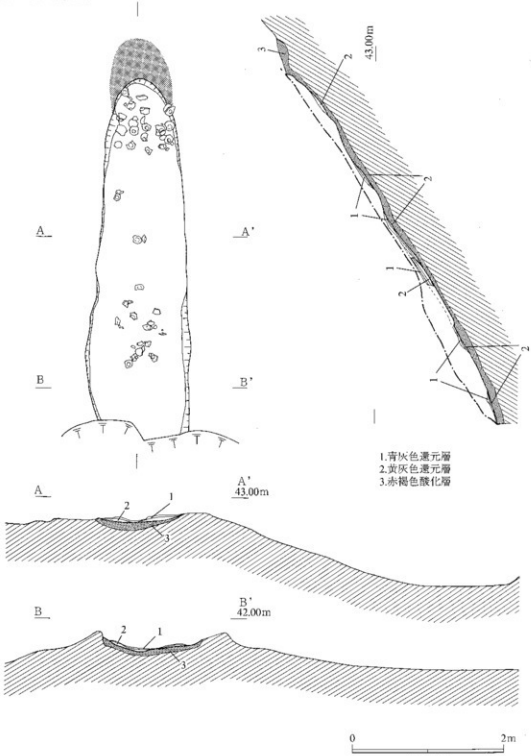
甕（562・563）

口径14.1㎝～14.5㎝。口縁端部を内側に突出させる。体部外面に平行叩き、内面に同心円のあて具痕を残す。

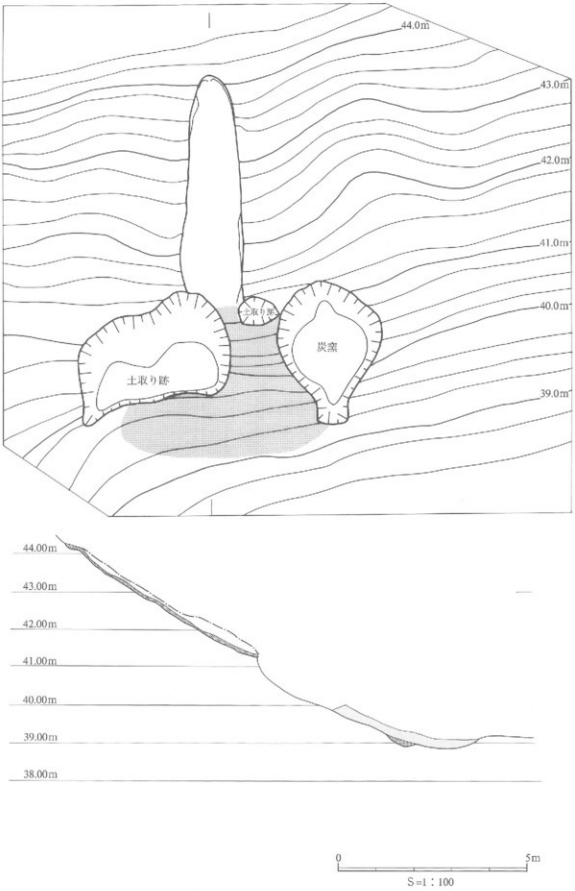
第４節　緑ヶ丘落矢ヶ谷11号窯

１．窯の立地と構造

９・10号窯と同じ北に開口する谷に立地するが、本窯はこの谷に開析する小支谷の北向き斜面裾部に構築されている。標高は焚口で41mを測り、谷基底部からの比高差は約２mである。窯体主軸の方位はN－23°－Eである。



挿図15　緑ヶ丘落矢ヶ谷11号窯　窯体実測図



挿図16　緑ヶ丘落矢ヶ谷11号窯　地形測量図

窯体の焚口部と灰原上半部が近代の炭窯および土取りによって失われている。窯体の左右の斜面は凹状地形を呈しており、窯体部との高低差はおよそ0.5m～1mある。このため、窯体部は馬の背状の高まりの形状を呈している。

窯体は地山の掘り込みのほとんどない地上式の窯である。側壁の残存高は最も残りのよい左側壁下位で10cm前後で、右側の壁はまったく残存しない。

窯体の残存長は5.4mで、窯体幅は焚口近くで1.2m、焼成部で1.1m、先端部で0.8mを測る。

炭　窯

焚口部は土取りによって失われているが、窯体は先端にゆくほど幅が狭まる砲弾形の平面プランの形状を呈している。床ははぼ直線的に立ち上がり、傾斜角度は29°～30°である。

焼成部の床面は上面の青灰色が凋がれ、直下の黄色還元層および赤褐色の被熱層が露出している箇所がある。また、側壁・床面とも基本的には素掘りのままで粘土による被覆はないが、部分的に窪まっているところを粘土で被覆している箇所があり、この部分では床面が2枚認められる。焚口は前述の通り、土取りによって削平を受けており、残存しない。遺物は焼成部と焼成部先端の排煙口付近に残存していた。焼成部先端の遺物は、いずれも椀・杯類で、底部を上にして置かれていた。その多くは一部が破損しただけの比較的完形に近いもので、位置が多少ずれて乱れはしているが、4～5個を列単位にして階段状に並べられており、焼台として使用されたものであることがわかる。排煙口から窯体外に被熱層が延長約0.5m上方の斜面に延びる。

灰原は近代の炭窯および炭窯構築に伴う土取りによって破壊されているが、扇形に下方に広がり、谷基底部まで達する。灰層の厚さは0.2m程度である。遺物出土量は窯体出土のものを含めて51箱である。

2．遺物

椀C（*601*～*636*）

底部は回転糸切り。体部は底部から湾曲して立ち上がり、口縁端部を小さく外反させる。平高台の側面は*608*・*615*・*633*のようにヘラ状工具によって整形しているものもある。

底径に対して口径比が大きい。口径14cm～17cmの一群と口径17cm以上の一群の大きく2群に分かれるが、*601*～*604*のように口径14cm以下の小型のものも少量存在する。

突帯椀（*637*～*644*）

輪高台は外方に踏ん張るが、*640*のように高さが高いものと*641*～*644*のように高さの低いものがある。*641*の出土資料から突帯椀同士重ね積みして焼成したことがわかる。

台付皿（*645*）

本窯で全体が復元できたのは本例1個体のみである。底部は糸切りの平高台を有する。

杯A（*646*～*664*～*671*・*673*）

口径13cm～16cm。器高３cm～４cmのものが大半であるが、*656*のように器高が４cmを超える高いものもある。底部はヘラ切り不調整。体部外面の凹凸が激しいのが特徴である。口縁部は*648*・*649*・*655*のように外反するものも若干ある。

皿A（*672*・*673*）

口径15cm～16cm、器高1.7cm。底部ヘラ切り不調整。673は口縁部が大きく外反する。

壺蓋（*674*・*675*）

つまみは扁平な宝珠形をしている。天井部外面はヘラ切りの後、ナデによる仕上げを施している。縁端部はやや外方に反り返り、口縁端面は平坦である。

壺L（*676*）

口縁11.2cm。大きく外反する口縁をもつ。体部下半を欠くが、乳母ヶ懐３号窯出土の205と同形態の壺になろう。

硯（*677*）

硯面中央に突帯を設けて硯面を２分した、いわゆる２面硯である。硯頭と硯尻の２片が出土しており、硯背後方尻には径1.4cm、高さ1.8cmの脚を設けている。縁帯の高さは0.8cmで、硯頭から硯尻まで同じ高さである。縁帯の断面は三角形状で２本の指で挟みながら硯面部に接着させている。

双耳壺（*678*～*688*）

多数出土している。上下２本の突帯を巡らすのを基本形とするが、*680*・*684*のように突帯ではなく、沈線を巡らすものがある。口縁は大きく外反し、端部を上方につまみ上げる。*679*・*683*・*686*の体部には粗い叩きの痕跡が残されているが、内面の叩きの当て具痕については表面上の観察では確認できない。*679*・*686*は外面の叩きの凹凸が内面の器壁にまで及んでいる。底部は乳母ヶ懐３号窯や蓜欠ヶ谷10号窯の双耳壺と同じく、粘土塊を円盤状にして底部を形作っている。いずれも底部外面の周縁部には幅２cm前後のヘラの回転痕が残る。左右の耳は下半部を２本の指で挟んで押さえつけながら体部に接着させたもので、平面の形状はＹ字形を呈している。

鉢D（*689*～*694*・*697*～*700*）

肩部に最大径をもち、肩部から底部にかけて急速に窄まる。口縁端面は*691*のように丸く収めるものもあるが、大半は平坦である。平高台をもつのが大半であるが、*692*のように輪高台をもつものもある。底部は双耳壺と同じく粘土塊を円盤状にして形作ったもので、底部外面の周縁部にはヘラの回転の痕が残されている。

壺A（*695*・*696*）

695・*696*ともに口縁部を欠く。肩に上下２本の突帯を巡らす。底部は双耳壺や鉢Dと同じく粘土塊を円盤状にして形作ったもので、底部外面の周縁部にはヘラの回転の痕が残されている。体部外面に平行叩きの痕が残る。内面は図示していないが、あて具痕がかすかに残されている。

底部（*697*～*700*）

上半部を欠いた底部辺のみを一括した。いずれも双耳壺や鉢D・壺Aと同様、粘土塊を円盤状にして作られ、底部外面にヘラによる回し切りの痕が残されている。*700*の底部外面には製品をロクロ台からはずす際に差し込んだヘラの痕が残されている。

*699*は乳母ヶ懐３号窯出土の手付瓶*199*とよく似た広い底部と湾曲する体部をもつ。

第４章　相生窯址群における平安期の須恵器について

第１節　緑ヶ丘落矢ヶ谷支群における須恵器の変遷と特徴

山陽自動車道建設に伴い、落矢ヶ谷支群10基の平安期の須恵器窯跡の発掘調査を実施し、これまでその概要について記してきた。ここでは、このうち出土遺物量の限られている落矢ヶ谷７号窯・同８号窯の２基を除く８基の窯跡の器種の特徴と器形の消長について簡単なまとめを行ない、あわせて落矢ヶ谷支群における須恵器窯の構築順位について検討を加えておきたい。

１．構成器種の特徴

椀Ｃ

糸切りの平高台を有する。落矢ヶ谷10号窯・落矢ヶ谷２号窯では平高台の側面をヘラ状工具で削って整形しているが、体部が腰の部分から丸みをもって立ち上がり、口縁端部は丸く収めるのが特徴である。これに対して他窯では高台側面の調整は施しておらず、口縁端部を外反させる。また、体部外面中位に沈線または段を有するもの（Ｃ２類として別区分）が、落矢ヶ谷10号窯と落矢ヶ谷２号窯のほか、乳母ヶ懐３号窯からも出土している。落矢ヶ谷１号窯・同３号窯では底部内面に段をもつもの（Ｃ３類として別区分）が新たに加わっており、新しい傾向と見なされる。

突帯椀

全窯に認められる。糸切りの平高台に輪高台を付すａタイプが通常の形態であるが、平高台に底部外面の縁辺部に幅５㎜前後の溝を掘って輪高台風にみせるｂタイプがある。ｂタイプは落矢ヶ谷10号窯と乳母ヶ懐３号窯のみに認められる。

台付皿

糸切りの平高台をもつ。全窯に認められるが、落矢ヶ谷11号窯、同１号窯、同３号窯での出土量はごく少量である。なお、落矢ヶ谷１号窯出土の台付皿は小型であり、落矢ヶ谷10号窯から連なる台付皿の系譜を引くものか、あるいは土師器の柱状高台をもつ皿の模倣によるものかどうかは不明である。

双耳壺

全窯に認められるが、乳母ヶ懐３号窯と落矢ヶ谷11窯では出土点数がきわめて多い。耳は下半分を両横から挟み付けて体部に接着させたためにＹ字形もしくは三角形状の平面形態をしている。頸部に突帯をもつもの（ｂタイプ）が落矢ヶ谷10号窯と乳母ヶ懐３号窯から出土している。突帯は２本を基本とするが、突帯の代わりに沈線をもつもの（ｃタイプ）が乳母ヶ懐３号窯と落矢ヶ谷11号窯から出土している。体部は叩き痕と当て具痕を内外面に残すもの（10号窯578、乳母ヶ懐３号窯155）と全く叩き成形痕を残さないもの（乳母ヶ懐３号窯154・11号窯685など）の２者がある。また、落矢ヶ谷10号窯、乳母ヶ懐３号窯、落矢ヶ谷11号窯の双耳壺の底部は外面に掌紋あるいは指の押圧痕を残し、周縁部にはヘラの回転による切り離しの痕が残されているのが特徴である。

杯Ａ

全窯に認められる中心器種の１つである。底部はすべてヘラ切りである。

壺Ａ（短頸壺）

体部に突帯を巡らすものと巡らさないものがある。前者は乳母ヶ懐３号窯・落矢ヶ谷11窯・落矢ヶ谷

3号窯から出土している。落矢ヶ谷支群以外では入野6号窯から1本突帯の壺Aが出土している。

手付瓶

落矢ヶ谷2号窯・乳母ヶ懐3号窯・落矢ヶ谷4号窯から出土している。落矢ヶ谷2号窯・乳母ヶ懐3号窯ともに体部に3筋の横位沈線文を巡らすのが特徴である。

鉢D

口縁部が「く」の字状に屈曲し、底部は平高台を有する。乳母ヶ懐3号窯と落矢ヶ谷11号窯では比較的まとまった量が出土しており、口縁から底部まで復元できるものが多数存在する。両窯の鉢Dの底部外面は双耳壺と同じく掌紋あるいは指の押圧痕を残し、周縁部にはヘラの回転による切り離しの痕が残されているのが特徴である。他の窯址では出土点数が少なく全体を復元できたものは皆無である。なお、落矢ヶ谷3号窯では鉢D形態ではなく、神出窯・魚住窯などで生産されている片口鉢形態のものが出土している。

皿A

器高の低い浅皿形態のものと杯Aの器高をやや低くした形態のものがある。前者は落矢ヶ谷2号窯・乳母ヶ懐3号窯・落矢ヶ谷4号窯から出土しており、後者は落矢ヶ谷2号窯・8号窯・4号窯・9号窯・11号窯から出土している。

甕・その他

落矢ヶ谷2号窯で若干量の甕片が出土しているが、これ以外の窯址では甕の生産量が極めて少ないのが特徴である。このほか、風字硯・高杯・耳皿などがあるが、全窯から出土しているというわけではなく、主として乳母ヶ懐3号窯から出土している。

各窯の器種構成については第1表に示した通りである。落矢ヶ谷支群では糸切りの平高台椀とヘラ切りの杯Aの小型供膳器種を生産の中心としており、甕類の大型貯蔵具の生産量のきわめて少ないのが特徴である。少量ながら突帯椀・双耳壺・鉢あるいは台付皿・手付瓶など特定器種の生産が行われているが、これらの少量器種の消長を椀類の形態的変化とともに各窯の構築順位の判断基準の1つとしている。このことについては本節第3項ならびに第2節に譲りたい。

器種 / 窯	椀 C			突帯椀		杯	台付皿	皿	双耳壺			短頸壺		手付瓶	壺	甕	鉢	鉢	風字硯	高杯	耳皿
	c1	c2	c3	a	b	A		A	a	b	c	突帯なし	突帯有		L		D	A			
10号	○	○		○	○	○	○		○	○		○				○	○				
2号	○	○		○		○	○	○	○					○		○	○				
乳3	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
11号	○			○		○	△		○		○	○	○		○	○	○		○		
9号	○			○		○	○	○	○						○		○		○		
4号	○			○		○	○	○	○					○	○	○	○				
1号	○		○	○		○	○		○							○	○				○
3号	○		○	○		○			○				○			○					

第1表　緑ヶ丘落矢ヶ谷支群器種構成表

2．糸切り平高台椀（椀C）における法量の分析

糸切り平高台椀における形態的変化の素因は口径・器高・底径（高台径）のバランスの変化によるところが大きく、とりわけ口径に対する底径（高台径）の縮小化と密接に関係している。編年を検討する材料の1つとして、落矢ヶ谷支群の8基の窯跡出土の糸切り椀の口径と器高および口径と底径（高台径）の関係を示した分布図を作成して各窯の特徴を求めておきたい。

⑴　口径と器高の分布図（挿図17～18）

口径と器高の2次元データをｘｙ軸にプロットしたものである。口径をｙ軸方向に器高をｘ軸方向にとってある。そして、各窯の分布傾向の特徴と各窯ごとの比較が可能なように、椀Cの本格的生産期の中でもっとも古く位置づけている落矢ヶ谷10号窯と落矢ヶ谷2号窯のデータを基準にし、原点からｘ軸のプラス方向に6㎝、ｙ軸のプラス方向に15㎝移動して新座標軸を設定している。

⑵　口径と底径の分布図（挿図19～20）

図はLI径をｙ軸にとり、底径をｘ軸にとっている。そして、口径と器高の分布図と同様に、各窯の分布傾向の特徴と各窯ごとの比較が可能なように、落矢ヶ谷10号窯のデータを基準にし、原点からｘ軸のプラス方向に6㎝、ｙ軸のプラス方向に15㎝移動して新座標軸を設定し、さらに座標軸の原点と新座標軸の原点を結んだ傾き2.5（LI径／底径）の直線を引いている。

8基の窯跡の分布データは大きく次の3つのパターンに分けることができる。

Aパターン（落矢ヶ谷10号窯・落矢ヶ谷2号窯）

口径12㎝～13㎝代、LI径14㎝～15㎝代および口径16㎝以上の3群に分かれるが、口径16㎝以上のものは体部に沈線や突帯を巡らせた特殊品で、口径の中心は14㎝～15㎝代である。口径と底径の分布は各ドットの座標が傾き2.5の直線より下に位置するのが特徴である。

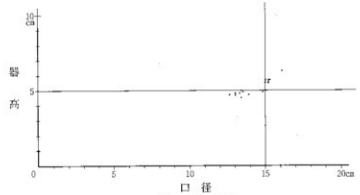
Bパターン（乳母ヶ懐3号窯・落矢ヶ谷9号窯・落矢ヶ谷4号窯・落矢ヶ谷11号窯）

口径17㎝以上の法量の大きな一群が分布し、全体にAパターンの窯より口径の拡大化が認められる。なお、乳母ヶ懐3号窯では、小型の一群の出土点数も少なくなく、落矢ヶ谷4号窯・落矢ヶ谷9号窯、・落矢ヶ谷11号窯とは違った様相を示している。口径と底径の分布は各ドットの座標が傾き2.5の直線より上に位置しており、Aパターンの窯に比べて、口径に対して底径比が小さくなっていることを示す。但し、落矢ヶ谷9号窯・乳母ヶ懐3号窯では、傾き2.5の直線より下に分布するものもある。

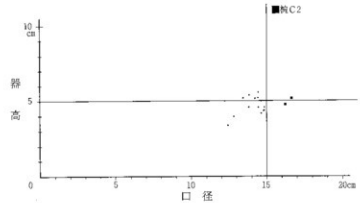
Cパターン（落矢ヶ谷1号窯・落矢ヶ谷3号窯）

落矢ヶ谷3号窯に口径15㎝以上のものが若干存在するが、主体は口径15㎝以下の小型品が中心である。底径は6㎝以下で、第Ⅳ象限に小さくまとまる。口径と底径の分布は傾き2.5の直線の上下に分布する。

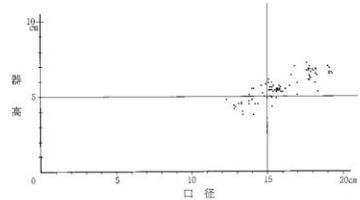
以上がLI径と器高、口径と底径のそれぞれの2次元データから得られた結果である。第3項で述べるように、各パターンの違いは年代差を反映しているものと判断される。すなわち、パターンの変遷は、Aパターン（落矢ヶ谷10号窯・落矢ヶ谷2号窯）→Bパターン（乳母ヶ懐3号窯・落矢ヶ谷9号窯・落矢ヶ谷4号窯・落矢ヶ谷11号窯）→Cパターン（落矢ヶ谷1号窯・落矢ヶ谷3号窯）となり、口径に対する底径比の縮小化、Bパターン期における口径の拡大化からCパターン期における口径の縮小化の傾向を看取することができる。但し、これは落矢ヶ谷支群のみの分析結果であって、相生窯址群中の他の支群の窯跡についてはデータ処理を行っていないので、相生窯址群全体の分析結果ではない。従って、分析データとしては不充分ではあるが、およその傾向は示していると考えている。



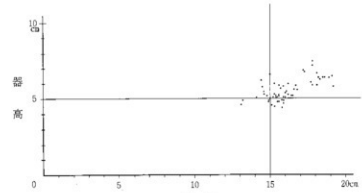
落矢ヶ谷10号窯



落矢ヶ谷２号窯

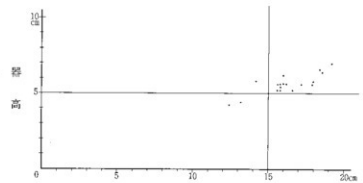


乳母ヶ懐３号窯

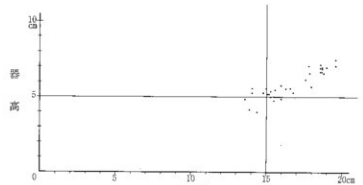


落矢ヶ谷９号窯

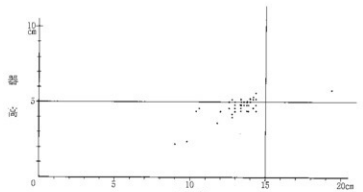
挿図17　椀Ｃの口径と器高の分布図１



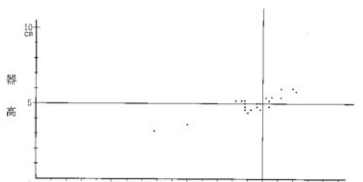
落矢ヶ谷4号窯



落矢ヶ谷11号窯

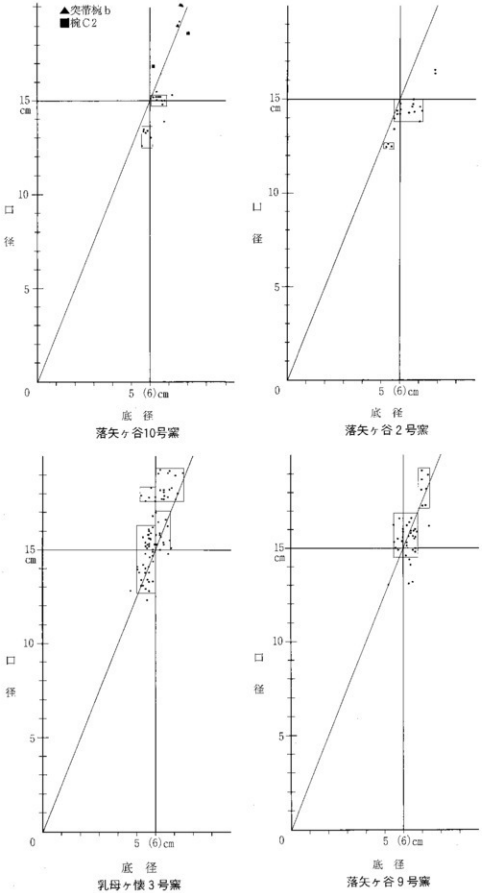


落矢ヶ谷1号窯

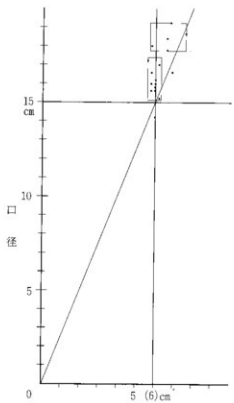


落矢ヶ谷3号窯

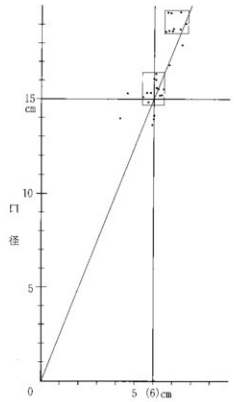
挿図18　椀Cの口径と器高の分布図2



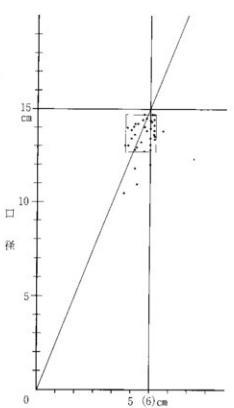
挿図19　椀Cの口径と底径の分布図(1)



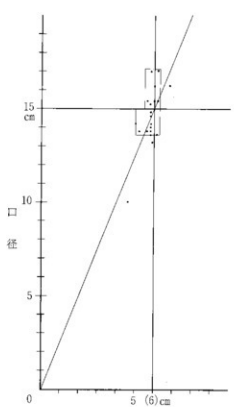
落矢ヶ谷4号窯



落矢ヶ谷11号窯



落矢ヶ谷1号窯



落矢ヶ谷3号窯

挿図20　椀Cの口径と底径の分布図(2)

3．落矢ヶ谷支群における須恵器窯の構築順位について

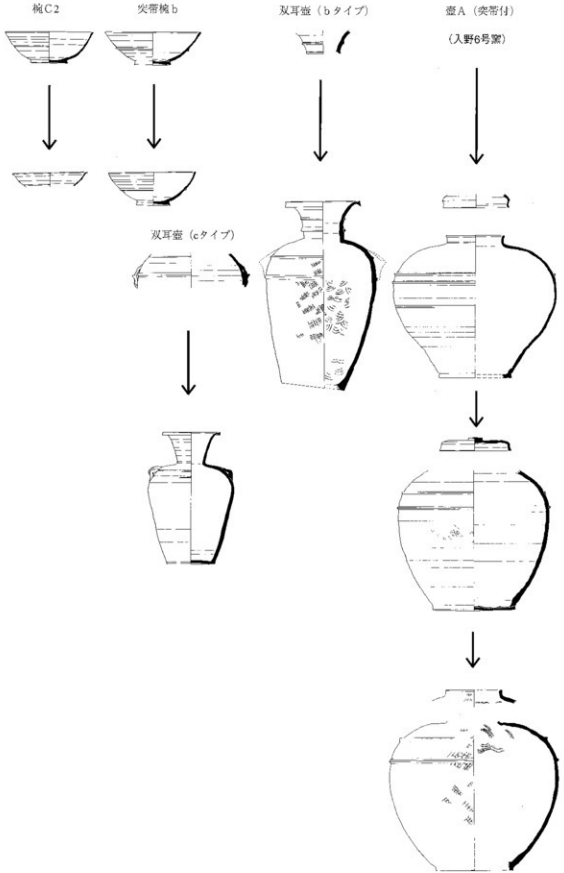
先に刊行した報告書では落矢ヶ谷1号窯～4号窯の構築順序について、2号窯を最も古く位置づけ、続いて4号窯、1号窯および3号窯としたが、ここでは、今回報告の落矢ヶ谷9号窯～11号窯および乳母ヶ懐3号窯を加えて、第1項および第2項で検討した器種の特徴と器種構成ならびに椀Cにおける法量変化をもとに落矢ヶ谷支群における須恵器の変遷について検討しておきたい。

まず、第1表の器種構成表から特定の器形をピックアップし、その消長を挿図21に示す。このうち、体部に沈線をもつ椀C2および糸切りの平高台の底部外面周縁部に溝を巡らせて輪高台風に見せた突帯椀bタイプは落矢ヶ谷10号窯と乳母ヶ懐3号窯に認められる。さらに口頸部に2本の突帯を巡らせた双耳壺がこの両窯のみに出土している。このほか、肩部に突帯の代わりに沈線を巡らせた双耳壺が乳母ヶ懐3号窯（細片）と落矢ヶ谷11号窯から出土しており、突帯をもつ壺A（短頸壺）は乳母ヶ懐3号窯・落矢ヶ谷11号窯・落矢ヶ谷3号窯から出土している。以上の特定器形の消長から判断すると、窯の構築順位は、落矢ヶ谷10号窯→乳母ヶ懐3号窯→落矢ヶ谷11号窯→落矢ヶ谷3号窯の順となる。

一方、上記4基以外の窯についてみると、まず、落矢ヶ谷2号窯は、平高台椀の形態および体部に沈線を巡らせた椀C2の存在から落矢ヶ谷10号窯とほぼ同時期と判断している。落矢ヶ谷1号窯は椀C3の形態および器種構成から落矢ヶ谷3号窯と相前後する時期と考えられる。このほか、落矢ヶ谷4号窯については、前報告書において器高の低い皿Aの存在から判断して落矢ヶ谷2号窯より後出の窯で、乳母ヶ懐3号窯より先行する窯と考えていたが、乳母ヶ懐3号窯における上記の椀C2、突帯椀bタイプ、2本の突帯を巡らせた双耳壺の存在などの点から乳母ヶ懐3号窯は落矢ヶ谷4号窯よりも先行する要素が認められ、現段階では両者の先後関係については明らかにできない。落矢ヶ谷9号窯と乳母ヶ懐3号窯の先後関係についても同様であり、今の所、乳母ヶ懐3号窯と落矢ヶ谷4号窯・9号窯はほぼ同時期と考えておきたい。器種構成等の共通性から落矢ヶ谷10号窯・乳母ヶ懐3号窯・落矢ヶ谷11号窯のグループと落矢ヶ谷2号窯・落矢ヶ谷4号窯・落矢ヶ谷9号窯の2系統のグループが存在しているような様相も窺えそうであるが、この点については今後検討したい。

ところで、前項で示した椀の法量の分析データでは、落矢ヶ谷10号窯・落矢ヶ谷2号窯（Aパターン）→乳母ヶ懐3号窯・落矢ヶ谷9号窯・落矢ヶ谷4号窯・落矢ヶ谷11号窯（Bパターン）→落矢ヶ谷1号窯・落矢ヶ谷3号窯（Cパターン）となり、器種構成からみた須恵器窯の構築順位と基本的に一致しており、各パターンの違いは年代差を示していると考えてよい。このうち、乳母ヶ懐3号窯は落矢ヶ谷9号窯・落矢ヶ谷4号窯・落矢ヶ谷11号窯とは同じBパターンに含めているが、口径15cm以下の一群の存在が顕著であり、落矢ヶ谷11号窯以下とは若干異なるパターンを示しており、乳母ヶ懐3号窯から落矢ヶ谷11号窯への器形変化の流れが妥当とすれば、このパターンの違いは年代差を示していることになる。

上記の通り、器種構成の変化・椀の法量の変化から想定した落矢ヶ谷支群における須恵器窯の構築順序は、落矢ヶ谷10号窯・落矢ヶ谷2号窯→乳母ヶ懐3号窯・落矢ヶ谷9号窯・落矢ヶ谷4号窯・落矢ヶ谷11号窯→落矢ヶ谷1号窯・落矢ヶ谷3号窯である。前回の報告書においては落矢ヶ谷2号窯・落矢ヶ谷4号窯と落矢ヶ谷1号窯・落矢ヶ谷3号窯の器種形態など差が大きいことを述べたが、今回、整理報告を行った4基も、この間を埋める資料とはなりえなかった。次節において、この問題点を含めて、相生窯址群の平安期の須恵器の変遷について検討することにしたい。



挿図21　落矢ヶ谷支群における特定器形の消長

第２節　　相生窯址群における編年の再考

１．編年の概要

相生窯址群における平安期の遺物の特徴と変遷については、昭和60年に刊行した『相生市　緑ヶ丘窯址群』[1]他においてその概要を示した。この時点では、以前に示した３つの段階の区分案[2]を踏襲し、第１段階を奈良時代以来の伝統的な杯Ｂの系譜を引く輪状高台をもつ椀（椀Ａ）の生産期、第２段階をヘラ切りの平高台をもった椀（椀Ｂ）の出現以降、第３段階を糸切りの平高台椀（椀Ｃ）として仮の編年案を提示した。

ヘラ切り平高台椀を糸切り平高台椀の先行形態とした根拠は、ヘラ切りの平高台椀の生産を主体とする西後明７号窯において、ヘラ切りの平高台椀以外に杯Ｂや杯Ｂ蓋など糸切りの平高台椀の出現以降には見られない８世紀以来の器種が残存していることにある。また、同じ器種構成の様相が当該窯跡群の西後明７号窯だけでなく、兵庫県東部の末古窯跡群（三田市）の貝谷窯跡[3]においても認められることも根拠にあげた。さらに、昭和59年（1984）に発掘調査が行なわれた西後明41号窯[4]では杯Ｂ、杯Ｂ蓋を主体とする器種中に少量の平高台椀が含まれており、平高台椀の導入当初の窯跡と理解されるが、この平高台椀の底部の切り離しがヘラ切りであることも、ヘラ切り平高台椀が糸切り平高台椀に先行するという考えを裏付けるものと判断した[5]。

その後、西後明41号窯の翌年に発掘調査が行なわれた西後明23号窯[6]からヘラ切りとともに糸切りの平高台椀が出土し、ヘラ切り平高台椀が糸切り平高台椀に先行するという従前の考えから、当初は、西後明41号窯→西後明７号窯→西後明23号窯の構築順序を考え[7]、西後明23号窯をヘラ切り平高台から糸切り平高台への転換期の窯として位置づけようとした。ところが、西後明23号窯の出土遺物の仮分類をおこなったところ、杯Ｂ主体の器種構成および器種形態は西後明41号窯と全く同じで、ヘラ切り平高台椀を主体的に生産している西後明７号窯より先行する様相を示していることが明らかになった。西後明23号窯と西後明41号窯は、正式な遺物整理が行なわれていないので、両窯の先後関係については不明であるが、西後明７号窯に先行する西後明23号窯において糸切り平高台の椀が生産されているということは、平高台椀の生産開始当初から瓷器系器種の模倣とともに糸切り手法が導入されていたことを示すことになり、従来の段階設定の考え方を再検討する必要が生じた。

再検討の結果、23号窯における糸切りの存在は瓷器系の器種と同時に糸切り手法も導入されたことを示すものであり、41号窯におけるヘラ切り平高台椀の存在は、瓷器系器種の導入初期段階における新技法と旧来の技法の混在期、すなわち糸切り手法定着前の経過的現象と理解した。このことによって、第２段階の設定の指標を「ヘラ切り平高台椀の出現」から「瓷器系須恵器の出現」に改める。また、糸切り手法の導入時期を第２段階に遡らせたことにより、糸切りの開始以後としていた第３段階設定の指標を糸切り平高台椀の本格的な生産開始以後（８世紀以来の旧来の器種の消滅）に改める。各段階の見直し案の詳細については下記の通りである。

第１段階

奈良時代の杯Ｂの系譜を引く輪状高台をもった杯の生産を中心とする。平安期の輪状高台をもつ杯（杯Ｂ）の一群の中には、体部が直線的に立ち上がるものと湾曲して立ち上がるものの２種がある。前者は杯Ｂの系譜を引くものであるが、後者は緑釉陶器ならびに灰釉陶器のいわゆる瓷器系陶器の模倣器種である。従前はこの２種を区分せずに一括して椀（Ａ）としていたが、前者を杯Ｂ・後者を椀Ａとし

て分離し、第1段階は瓷器系器種の椀Aの導入以前とする。また、杯Bおよび杯B蓋の形態から第1段階を次の2期に区分した。

a期

杯Bの高台は底部外面の最も外寄りに付され、体部は斜めに立ち上がる。杯B蓋はつまみが残存している。発掘資料ではないが、西後明3号窯の遺物をこの期の標識資料としている。

b期

杯Bの高台は底部外面の最も外寄りに付され、体部は斜めに立ち上がる。器高が高く、口径に対して底径が小さい椀形の形状を呈する。杯B蓋はつまみを消失している。発掘資料ではないが、西後明12号窯の遺物をこの期の標識資料としている。

第2段階

瓷器系須恵器の出現（生産開始）期とする。

a期（西後明23号窯・西後明41号窯）

第1段階b期の輪高台をもつ杯（杯B）の生産を主体とするが、瓷器系の器種が新しく加わっており、瓷器系器種導入期の窯群として新たに位置づける。新たに加わった瓷器系器種には、前述の椀Aと平高台をもつ椀がある。

椀Aは口縁部が外反し、体部が湾曲して立ち上がる特徴をもつ。高台は高く踏ん張るものもある。

平高台をもつ椀にはヘラ切りのものと糸切りのものがある。西後明41号窯出土の平高台椀は仮分類した範囲においてはすべてヘラ切りであるのに対して、23号窯の平高台椀にはヘラ切りと糸切りがある。前者については体部が直線的で、底部内面に段を有するのに対して、後者は体部が湾曲し、底部内面は段を残さない点にそれぞれ形態的差がある。三田市相野古窯跡群における生産開始当初窯の向上・古城1・2号窯で少量ながら出土している糸切りの平高台椀は他のヘラ切りの一群に比して胎土が精良であることが報告されている[9]。当該窯跡群の場合、西後明23号窯出土の糸切り平高台椀が外来の瓷器系陶器製作工人の直接の手によるものか在地工人によるものかどうかは別にして、瓷器系陶器の製作技術・形態をともに忠実に移入して製作されたものとするならば、ヘラ切り平高台椀は在地工人が平高台椀の形態を模倣して器形を形作ったものの、底部の切り離しについては従来のヘラ切り手法を用いたものと理解できる[9]。

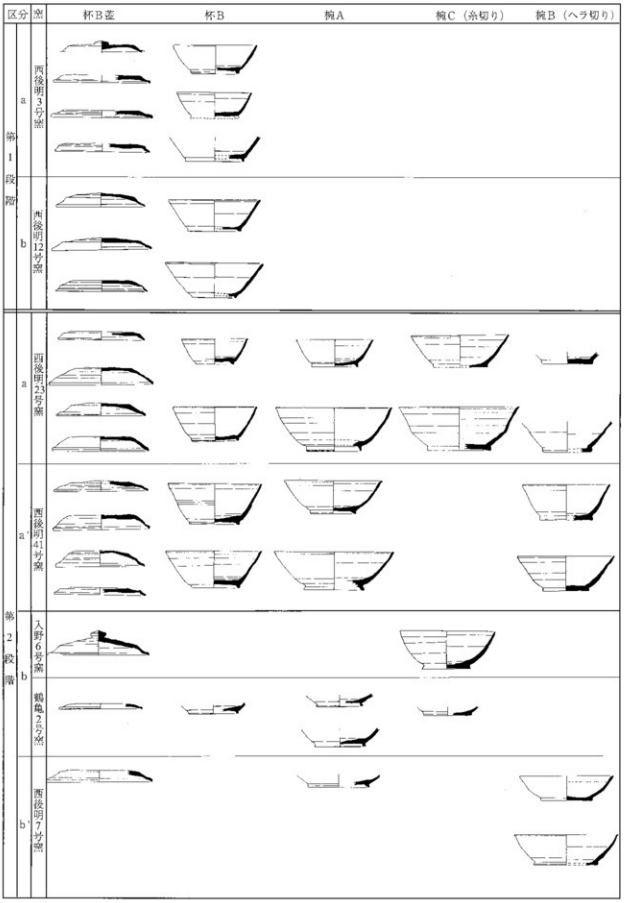
ヘラ切り平高台の場合と糸切り平高台の場合では、前述の通り体部の形状が異なるが、椀Aに認められる口縁部の外反はほとんどない。また、糸切り平高台椀、ヘラ切り平高台椀ともに平高台の高さは5㎜前後で、高台側面は垂直であるが、ヘラ切り平高台椀の大半は底部外面を手持ちまたはロクロ回転によるヘラ削りを行なっている。

双耳壺は突帯を有するものと有しないものがあり、初期の双耳壺の製作状況を示している。また、耳は長方形である。

b期（入野6号窯・鴾亀2号窯／西後明7号窯）

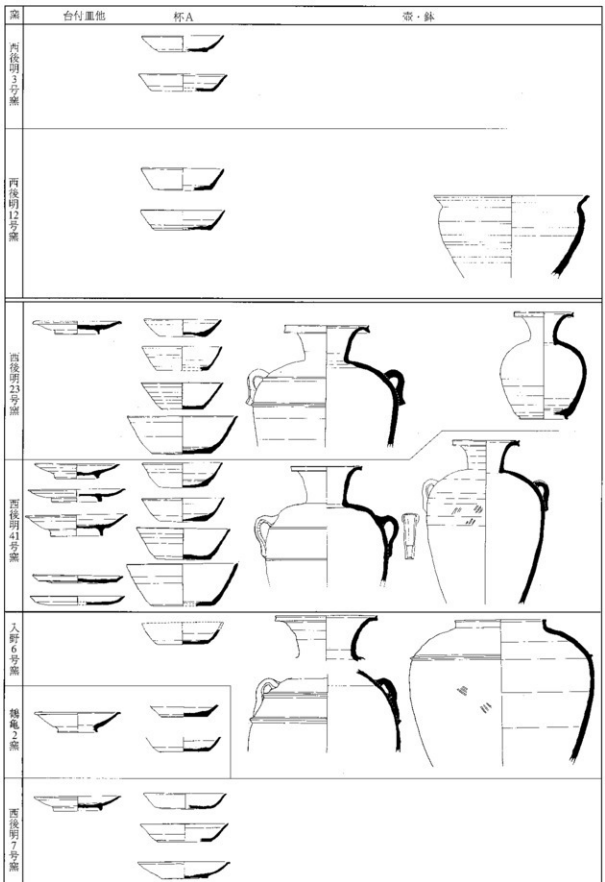
b期は瓷器系器種の本格的な生産開始期とする。a期の西後明23号窯や西後明41号窯では、生産の主体は杯Bを中心とした旧器種であり、瓷器系器種が導入されているが、ごく少量である。これに対して、b期では、杯Bなど旧器種は消失あるいは生産比率が小さくなり、瓷器系器種が中心器種となる。

入野6号窯[10]・鴾亀2号窯および西後明7号窯を当該期の窯とする。3窯ともに平高台椀の生産を行ない、器種構成および器種形態についてはほとんど同一型式の範疇に収まる。但し、平高台椀の底部の



挿図22　相生窯址群編年図１（その１）

S＝1/6



挿図23　相生窯址群編年図1（その2）

S＝1/6

切り離しについては、入野6号窯・鵜亀2号窯が糸切り手法、西後明7号窯がヘラ切り手法を用いている。従前、西後明7号窯を第2段階に、入野6号窯・鵜亀2号窯を第3段階の後出窯としていた。これは、ヘラ切り平高台椀が糸切り椀に先行するという当時の考えに基づいて先後関係を想定したものであるが、前述の通り、23号窯における糸切り平高台椀の出土により、ヘラ切り平高台椀が糸切り椀に先行するという考えが成立しなくなった。従って、両者の間に必ずしも先後関係が存在すると考える必要はなく、器種構成・器種形態ともに同一型式の範疇に収まることから判断して、両者は並行期の窯として理解したほうが妥当であろう。すなわち、西後明23号窯および西後明41号窯に導入された瓷器系器種のその後の生産展開は、西後明23号窯段階に導入された糸切り手法を早くに採用した工人集団と西後明41号窯のように瓷器系器種の生産は行なわれているが、底部の切離しについては従来からのヘラ切り手法に固執した工人集団の2つのタイプがあったと考える。平高台椀におけるヘラ切り手法の使用は、糸切り手法が器種とともに伝達されているにかかわらず、底部の切離しだけは従来の使い慣れた手法にこだわった一部の工人が存在する転換期の現象に過ぎないのであって、ヘラ切り平高台椀を編年の枠組みから切り離して、糸切り平高台椀の流れのみに主眼に置けば、西後明23号窯から入野6号窯・鵜亀2号窯を経て、次の第3段階に至る須恵器の変遷が比較的スムーズに理解できよう。

相生窯址群においては、平高台椀におけるヘラ切り手法は平高台椀の移入初期に限られ、その後は継続ないが、その理由としては、次のヘラ切りの特性に起因するものと理解したい。すなわち、ヘラ切り手法を用いた場合、概して底部外面の中心部が張らむという特徴を有する[11]。西後明41号窯出土のヘラ切り平高台椀の底部外面は手持ちによるヘラ削りが行われている。このことは、底部を丁寧に削って見栄えをよくしようとしたのではなく、底部を水平に保つことが要求される平高台椀の場合、ヘラ切りによって生じた凹凸や中央部の張らみを削って底面を平滑にし、製品を安定した状態に置くことを目的とした止むを得ない処置ではなかろうか。当該窯跡群においては、平高台椀の底部外面のヘラ切り手法が当初期に限られ継続しないのは、糸切りでは必要のない切り離し後の調整が必要という工程上の手間の理由によるものと考えたい。なお、杯・皿類など底面積の広い器種の切離しについてはすべてヘラ切りである。

第3段階

杯Bなど8世紀以来の器種が消失し、糸切り椀を主体とした器種構成に変わる。

山陽自動車関連で県教育委員会が発掘調査を実施した落矢ヶ谷支群はすべて糸切り平高台椀を器種の中心とした第3段階の窯跡である。前報告書では、落矢ヶ谷2号窯が先行し、4号窯がこれに続き、最後に落矢ヶ谷1号窯・3号窯となることを示した。

今回、整理を実施した乳母ヶ懐3号窯・落矢ヶ谷9～10号窯を加えて、再検討を図り、第2節で示した通り、法量等のデータ処理を実施した。この分析結果では、落矢ヶ谷10号窯・落矢ヶ谷2号窯（Aパターン）、乳母ヶ懐3号窯・落矢ヶ谷9号窯・落矢ヶ谷4号窯・落矢ヶ谷11号窯（Bパターン）、落矢ヶ谷1号窯・落矢ヶ谷3号窯（Cパターン）と3つのグループに分かれる傾向を示した。この分析結果と器種構成・椀Cの形態および調整法等を総合判断して次の通り、第3段階の細分化を試みた。

a期（落矢ヶ谷10号窯・2号窯）

杯B・杯B蓋・椀A形態の器種は消失しており、定形化した糸切り平高台椀の初期段階とする。

平高台椀の底部切り離しは全て糸切り手法で、ヘラ切り手法は一切用いられていない。平高台椀の形態的特徴は、ゆるやかなカーブを描いて立ち上がる体部をもつが、口縁部の外反はほとんどない。高台

の高さは5㎜前後で、高台側面はヘラで整形されており、高台側面は垂直ではなく、内側に切り込まれて切断面が台形状を呈しているのが特徴である。

糸切り椀の一群中に体部に沈線をもつものが存在する。体部に沈線を有するものは、加古川市志方窯跡群（札馬古窯跡群）中の札馬48号窯[15]や三田市の相野古窯跡群[13]においても認められる。相野古窯跡群の場合は操業の初期段階から最終段階まで認められ、また、輪高台をもつ椀にも認められるが、当該窯跡群では糸切り椀の初期段階である当該期のみに認められる。また、加古川市札馬5号窯からは、沈線ではないが、体部中央に削りだし風の段をもつものがあり、同一の系譜に連なる可能性がある。

突帯椀[16]は第2段階a期の西後明23号窯・西後明41号窯では認められないが、当該期には存在する。相野古窯跡群の場合、糸切り平高台椀の初現期の窯跡である向上・古城1号窯および2号窯から出土しており、当該窯跡群においても、その出現は第2段階b期の入野6号窯・鍋亀2号窯まで遡る可能性はあるが、両窯の発掘調査は行なわれていないので、現状では不明である。

第2段階で出現した双耳壺は体部に2本の突帯を有するのを基本とする。また、耳の形状が第2段階のものとは異なる。当該期以降の双耳壺の耳は、板状の粘土紐の下半部の両横を親指と人指し指で挟んで体部に接着している。このため、平面がY字形もしくは三角形状の耳の形状を有するのが特徴である。体部には叩き痕を有する。

このほか、落矢ヶ谷2号窯では、第2段階では認められなかった手付瓶が生産されている。また、台付皿の高台は前段階では輪高台であったが、当該期には糸切りの平高台に変化する。

b期

前述の通り、前報告書において落矢ヶ谷4号窯と落矢ヶ谷1号窯・3号窯との間には、糸切り椀の形態・器種構成等の差が大きいと記述した。今回、整理を実施した乳母ヶ懐3号窯・落矢ヶ谷9～11号窯の4基の窯は4号窯より先行、または同型式のグループに包括されるもので、落矢ヶ谷1号窯・3号窯との間を埋める資料とはなりえなかった。従って、ここでは取り敢えず乳母ヶ懐3号窯以下をb－1期、落矢ヶ谷1号窯・3号窯をb－3期とし、この間の該当資料は提示できないが、b－2期として仮に3期に区分しておきたい。

b－1期（乳母ヶ懐3号窯・落矢ヶ谷9号窯・落矢ヶ谷4号窯・落矢ヶ谷11号窯）

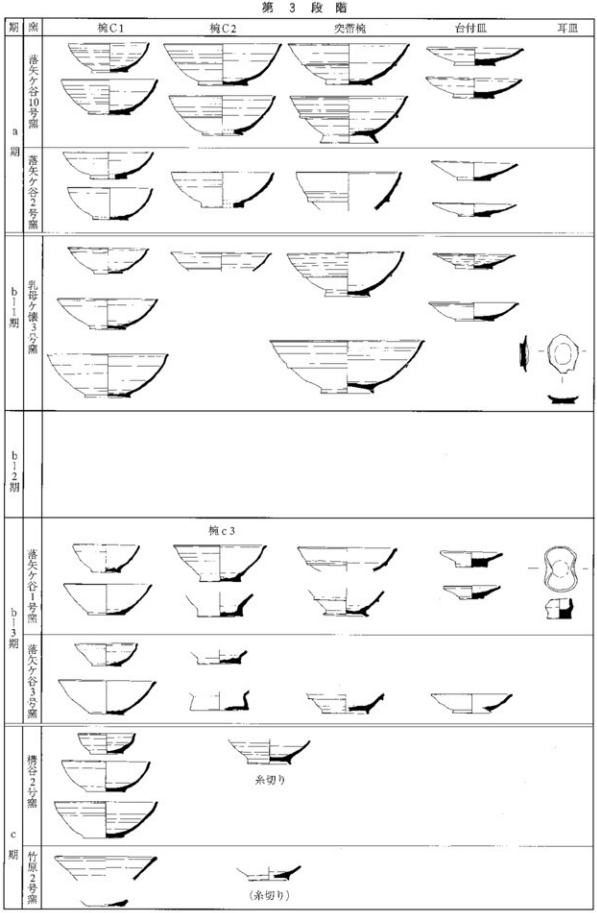
椀Cの体部は誇曲しながら立ち上がり、口縁部を外反させるのが特徴である。底部の高台側面の整形はほとんど行なわれない。椀Cの生産期で口径が最も拡大化する時期である。乳母ヶ懐3号窯・落矢ヶ谷4号窯では、落矢ヶ谷2号窯で生産されている手付瓶が存在する。また、口径に対して、低い器高のⅢAが生産されている。

b－2期

発掘調査を実施した落矢ヶ谷支群では該当する窯がない。相生市教育委員会が発掘調査を実施した緑ヶ丘一の谷2号窯跡・西後明19号窯では椀の縮小化みられ、この時期該当する可能性があるが、両窯の遺物を詳細に観察していないので、両窯の遺物の分類・観察を行ったうえで検討したい。

b－3期（落矢ヶ谷1号窯・落矢ヶ谷3号窯）

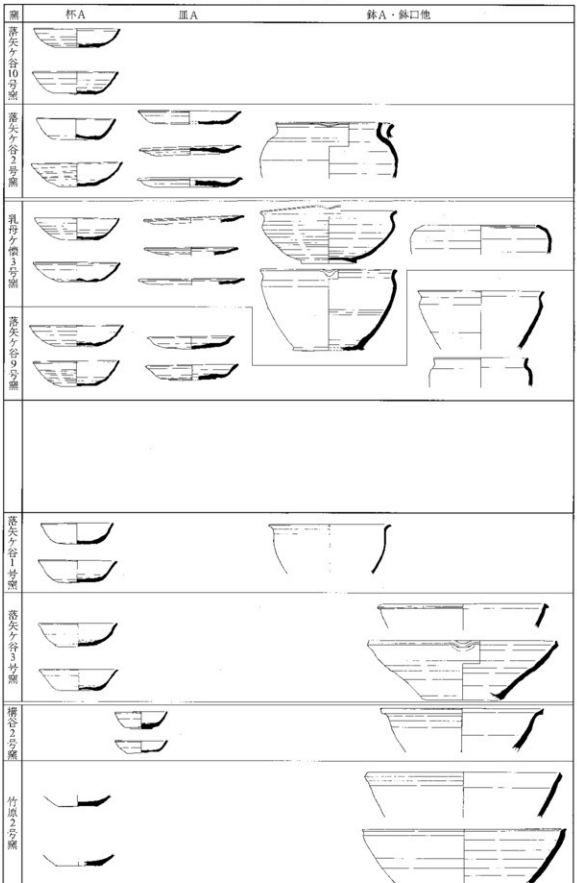
b－1期で拡大化した椀Cは口径が縮小し、小型化する。また、体部の湾曲はなくなり、体部は直線的に立ち上がる。高台の高さはわずかで形骸化している。器種は減少し、焼成は悪い。また、土師器的な托状形の器形が認められる。落矢ヶ谷3号窯では、神出古窯址群や魚住古窯跡群などで見られる中世的な片口鉢が出土している。



挿図24 相生窯址群編年図2（その1）

S＝1/6

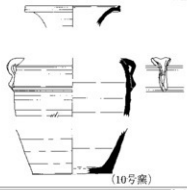
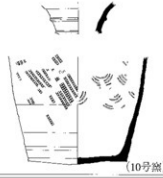
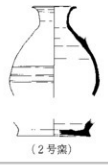
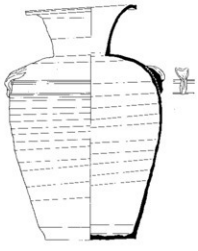
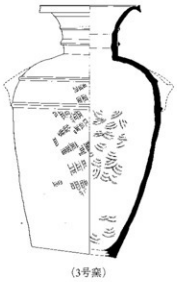
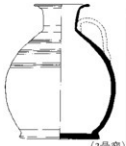
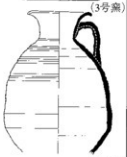
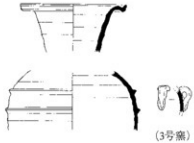
第 3 段 階



S＝1/6

挿図25　相生窯址群編年図２（その２）

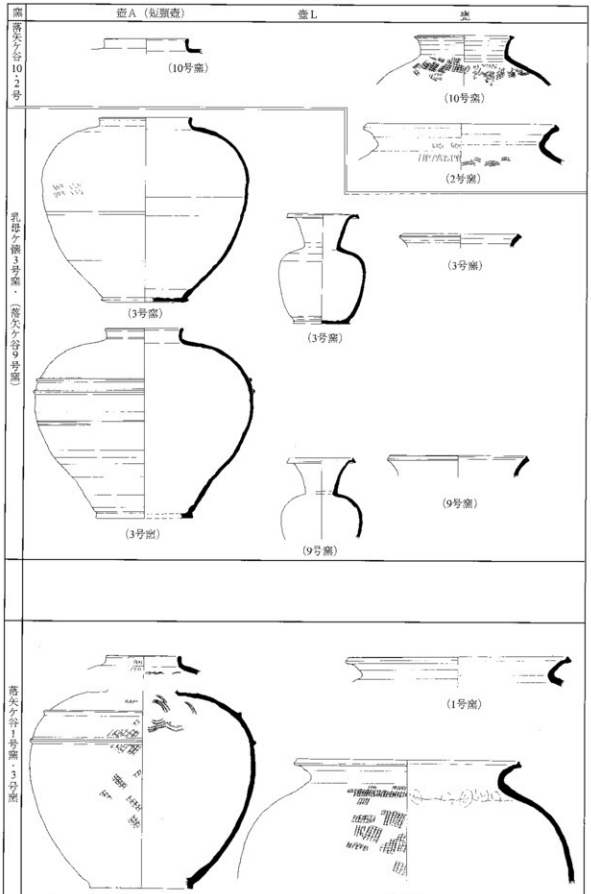
第 3 段 階

窯	双耳壺	手付瓶
落矢ケ谷10号窯・2号窯	 (10号窯)	 (10号窯)  (2号窯)
乳母ケ懐3号窯（落矢ケ谷9号窯）	 (3号窯)  (3号窯)	 (3号窯)  (3号窯)
落矢ケ谷1号窯・3号窯	(1号窯)  (3号窯)	
横谷2号窯		

挿図26　相生窯址群編年図２（その３）

S＝1/6

第 3 段 階



S＝1/6

挿図27　相生窯址群編年図２（その４）

c期

瓦陶兼業を主体とする時期である。椀Cは高台はほとんど消失する。新たに小皿が加わり、鉢が占める比率が高くなるのが特徴である。杯Aの底部の切り離しは糸切りとなる。こうした特徴をもつ窯跡は竹原2号窯・構谷2号窯等の旧揖保郡側に分布し、旧赤穂郡側では認められない。

2．各段階の年代比定について

相生窯址群における窯跡の発掘調査は古墳時代と平安時代に片寄っており、この間の8世紀～9世紀前半代の発掘調査についてはほとんど行われていない。永井信弘氏が表採資料を中心に編年案を示しているが[35]、表採資料の限界もあって8世紀後半代から9世紀代にかけての須恵器の変遷が明確ではない。従って、平安期の第1段階についても、相生窯址群における8世紀代からの須恵器の型式変遷を辿っての上ではなく、都城での編年を参考にして設定したもので、8世紀代の編年が進めば見直しが必要とされよう。ただ、現時点では西後明3号窯・西後明12号窯を標識資料として、第1段階を平安京Ⅰ新（810年～840年）の段階に比定しておきたい。

続いて、第2段階の年代比定について検討する。平安京における瓷器系の平高台を有する椀は平安京Ⅰ新段階(810年～840年）に出現し、平安京Ⅱ中（870年前後～900年）段階では杯Bを凌駕することが指摘されている。また、近年の平安京右京六条一坊十四町で相生産と思われる双耳壺が包含層から出土している。この包含層の年代はいくら下げても9世紀後半に留まり、10世紀には下り得ないとされており[36]、第3段階の開始期は少なくも9世紀後半代まで遡る可能性が高い。これらの平安京内での遺物編年や遺物の出土状況から判断して、第2段階については9世紀半ば頃を中心とした平安京Ⅱ古(840年～870年前後）の年代を想定したい。

第3段階の開始期（a期）は前述の通り、先に刊行した報告書『相生市・緑ヶ丘窯址群』[37]では9世紀代にはいる可能性があるとしながらも、結論については保留しておいた。上記の平安京右京六条一坊十四町の出土資料をはじめとする平安京内の瓷器系の平高台を有する椀の出土の年代観から9世紀後半代まで遡るものと判断したい。

今回、設定した第3段階のb期については、十分な資料調査の裏付けによるものではなくあくまでも暫定的な仮案であり、年代比定については本来編年の確立を待って検討するのが望ましいところであるが、ここでは見通しだけを述べておく。まず、b－1期の乳母ヶ懐3号窯出土の手付瓶が猿投窯の黒笹90号様式もしくは折戸53号様式期のものとされており、猿投窯の編年観では10世紀前後ということになる[38]。b－1期の存続幅は限定できないが、およそ10世紀前半代を想定しておきたい。

続いてb－2期とb－3期およびc期の年代について検討したいが、その前にc期の年代について検討しておきたい。c期の年代の参考となる資料として、平成3年度～平成4年度にかけて山陽自動車道建設に伴い兵庫県教育委員会によって発掘調査が実施された三木市久留美窯跡群柳谷支群の出土資料がある。柳谷支群の出土遺物は未整理であり、正式には報告書の刊行を待たざるを得ないが、平安京内の同范瓦の年代から12世紀前半代を中心とする年代が与えられることがほぼ確実になっている。柳谷支群の出土須恵器の器種には糸切り椀・小皿・鉢・甕などがあり、糸切り椀については高台をわずかに残すものとほとんど残さないものがある。こうした須恵器の器種構成と瓦陶兼業の形態は、当該窯址群におけるc期の遺物群と共通するものであり、c期の開始は院政期の造寺運動の関連があるものと考えてよく、12世紀前半代に中心年代があるものと考えておきたい。

b－3期の落矢ヶ谷1号窯・3号窯については、従前は12世紀前半代に位置づけていた。その根拠としては、落矢ヶ谷3号窯から出土している魚住・神出窯と同形態の片口鉢の存在などによるものであるが、c期の開始年代を12世紀前半代とすると、もう少し年代を引き上げる必要があるかもしれない。いずれにせよ、仮に設定しているb－2期の様相を具体的に提示できない以上、b－2期～3期の年代幅にまで言及するのは無理があるが、一応の目安として、b－2期を10世紀後半代から11世紀前半代、b－3期を11世紀後半代から12世紀前後としておきたい。b期の存続幅とc期の年代の問題については、三木市の久留美窯跡群や今年度発掘調査を実施した神出浄水場建設に伴う神出窯の整理報告書の刊行を待って改めて検討したいと思う。

以上、各期のおよその年代について述べてきたが、編年が確立していないうえに、年代推定の手掛かりとなる資料が生産地・消費地ともに乏しく、年代決定の絞り込みがきわめて難しい。現在、岸本道昭氏による龍野市内の遺跡を中心とした消費地遺跡出土の土師器・須恵器からのアプローチも行なわれており[10]、これらの研究成果や調査成果についても集約しながら総合的に判断する必要がろう。

第3節　まとめにかえて

山陽自動車道建設に関連して、緑ヶ丘落矢ヶ谷支群の須恵器窯址10基の発掘調査を実施した。相生窯址群の発掘調査については、昭和41年の鈴木豊彦氏による調査[11]が唯一で、この間、未調査のまま消滅した窯址も数多くある。しかし、当該窯址群の発掘調査を契機に、相生市教育委員会が窯址群の把握を精力的に行った結果、以後今日まで合わせて28基の窯跡の発掘調査が行われている（鈴木氏・県調査分も含む）。また、播磨地方においてこれまで発掘調査が行なわれた須恵器窯跡の数は200基以上にのぼるが、そのほとどが昭和54年の魚住古窯址群ならびに昭和54年・55年度の当該窯址群の調査、昭和55年の札馬窯址群の調査以降に行なわれもので、当該窯址群の調査は当地方だけでなく、播磨全体の窯業史研究のうえでも、その意義は少なくない。

当該窯址群の個々の調査意義についてみると、その1つめは、地上式の窯構造の存在を示したことがあげられる[12]。当初は当該窯址群の特有の窯構造であり、地質的な要因によるものではないかと考えたが、本窯址群の調査以後、札馬古窯跡群、藏谷窯（西脇市）などで同様の構造をもつ窯の調査が相次いで行なわれ、播磨の窯構造の特殊性であることがわかった。地上式の窯構造の問題については前回の『相生市・緑ヶ丘窯址群』で簡単に触れたが、時間的な制約もあり、今後、播磨地域の他の窯跡との比較を行ったうえで改めて検討したい。その2つめは、平安期の大規模な窯跡群の存在を示したことである。播磨地方において、当該窯址群の調査以降に行われた窯跡の数は180基にのぼるが、大半が平安期の窯跡である。律令期の須恵器調納国たる播磨国で、中世の神出・魚住窯跡群の生産発展に受け継がれるまでの平安期に営々と生産が行われている事実を示した初期の調査として評価してよい。

なお、今回の報告書では、昭和60年度に示した遺物編年案の再考案を示した。しかし、平安前期に出現した糸切り椀は平安時代後期まで継続して生産されているが、その形態的変化はきわめて乏しく、また、ゆるやかなものである。それ故、これまで大まかな編年案に留まり、より細かな編年の確立に至っていないのが実状であり、今回の報告にもその細分案は提示できなかった。調査後、十数年を経て、細分案を提示できない点については、調査に携わってきた者の怠慢の誇りを免れえないが、今回の報告書の刊行をもって、一応の区切りとして、改めて検討を重ねて行きたいと考えている。

註

(1) 西口和彦・森内秀造『相生市・緑ヶ丘窯址群』1986年　兵庫県教育委員会

(2) 森内秀造「兵庫県相生古窯址群について」『日本史論叢』第10輯　1983年　日本史論叢会

(3) 吉田昇「貝谷窯跡」『吉野ダム建設に伴う発掘調査報告書２』1988年　兵庫県教育委員会

(4) 松岡秀夫・河原隆彦他『相生市若狭野東部地区区画整理事業に伴う埋蔵文化財（西後明古窯跡群）発掘調査略報』1984年　相生市教育委員会，西後明古窯跡発掘調査団

(5) 森内秀造「平安時代の窯業生産－播磨地方の須恵器生産を中心に－」『北山茂夫追悼日本史学論集歴史における政治と民衆』1986年

但し、糸切りの先行段階として設定できたとしても、窯の数が少なすぎる点から存続期間はきわめて短いことを問題点として付言しておいた。

(6) 松岡秀夫・河原隆彦他『相生市西後明古窯跡群発掘調査略報（そのⅡ）』1985年　相生市教育委員会，西後明古窯跡発掘調査団

(7) 森内秀造・永井信弘「播磨とその周辺の須恵器」『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東須恵器－』 1993年　古代の土器研究会

(8) 山田清朝「向上・古城窯跡群の調査」『相野古窯跡群』所収　1992年　兵庫県教育委員会
三田市相野窯跡群では窯跡群の操業開始当初から廃絶期まで一貫してヘラ切りの平高台椀の生産が行なわれているが、生産開始当初時の向上・古城１号窯および２号窯からは糸切りの平高台椀が少量ながら出土しており、開窯当初には糸切り手法が伝えられていたことが明らかにされている。

(9) 相生窯跡群とともに播磨を代表する窯跡群である札馬窯跡群（志方窯跡群）では、平高台椀出現の当初段階から糸切りとヘラ切りの両切離し手法が併用されている。(中村浩・岡本一士・上月昭信『札馬古窯跡群発掘調査報告書』1982年　加古川市教育委員会)

(10) 入野６号窯の蓋はつまみを有する。この段階の窯では本来ならばつまみを消失しているはずであるが、未発掘でもあり、この問題は今後に検討したい。

(11) 那波風翔氏ご教示。(西口和彦・森内秀造　『相生市・緑ヶ丘窯址群』1986年　兵庫県教育委員会)

(12) 中村浩・岡本 一士・上月昭信『札馬古窯跡群発掘調査報告書』1982年　加古川市教育委員会

(13) 『相野古窯跡群』1992年　兵庫県教育委員会

(14) 昭和54年・55年の発掘調査当時は当該窯跡群のみであったが、その後、相野窯跡群においても発掘調査によって出土している。

(15) 森内秀造・永井信弘「播磨とその周辺の須恵器」

(16) 財団法人　京都市埋蔵文化財研究所　平尾政幸氏ご教示。

(17) 西口和彦・森内秀造　『相生市・緑ヶ丘窯址群』1986年　兵庫県教育委員会

(18) 斎藤孝正「東海地方の施釉陶器生産」『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東　施釉陶器－』 1994年　古代の土器研究会

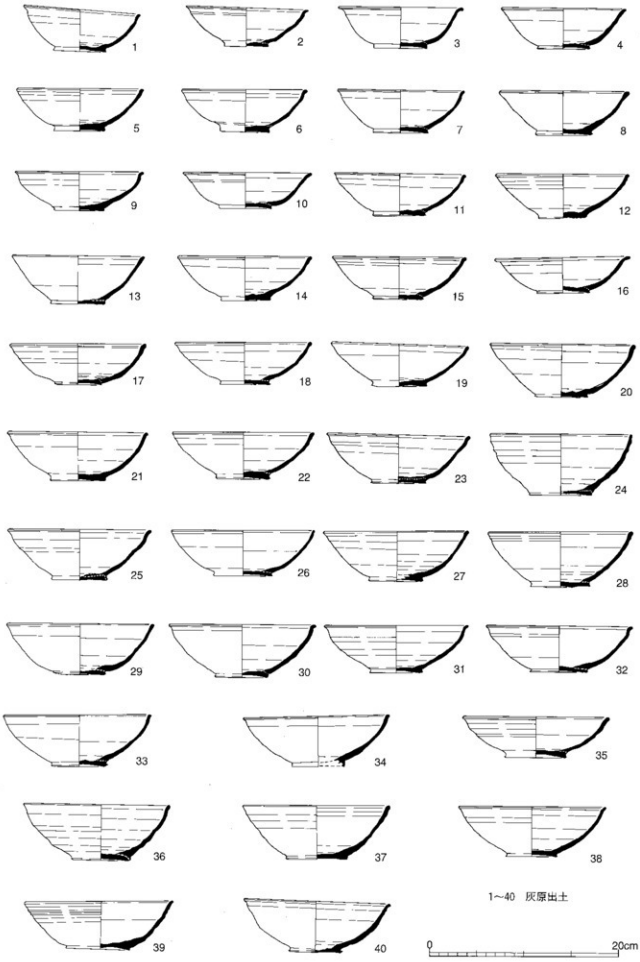
(19) 岸本道昭・中野倫太郎『布勢駅家－小犬丸遺跡1990・1991年度発掘調査概報』1992年　龍野市教育委員会

(20) 鈴木豊彦　『兵庫県相生市緑ヶ丘窯址調査について」『相生市史資料編』第10集　1966年　兵庫県相生市教育委員会)

(21) 地上式の窯構造の存在については大川清氏が指摘されている。(大川清「古代窯跡研究の問題点」『月刊　考古学ジャーナル』　1967年)

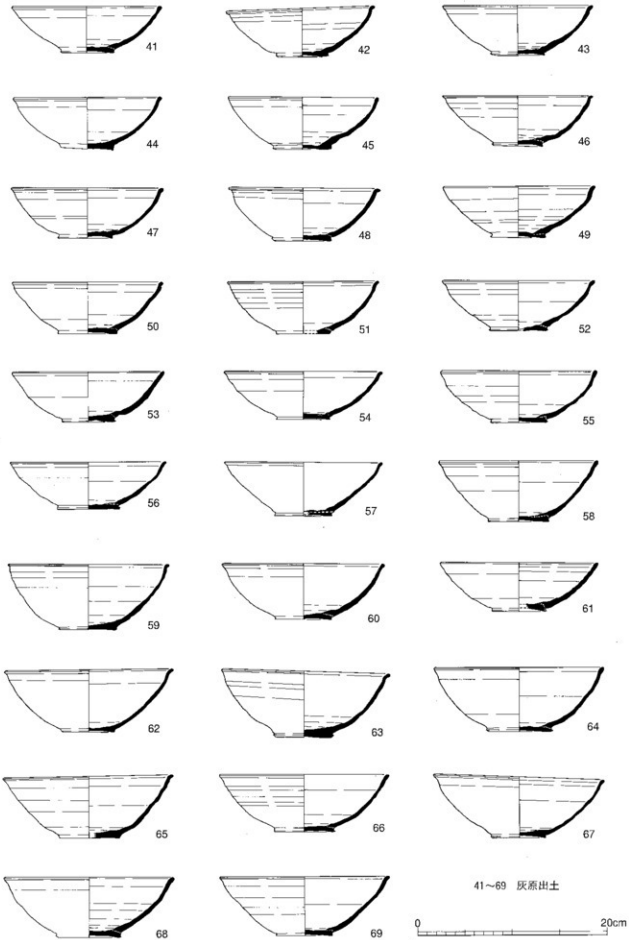
図　　面

乳母ヶ懐3号窯　出土須恵器

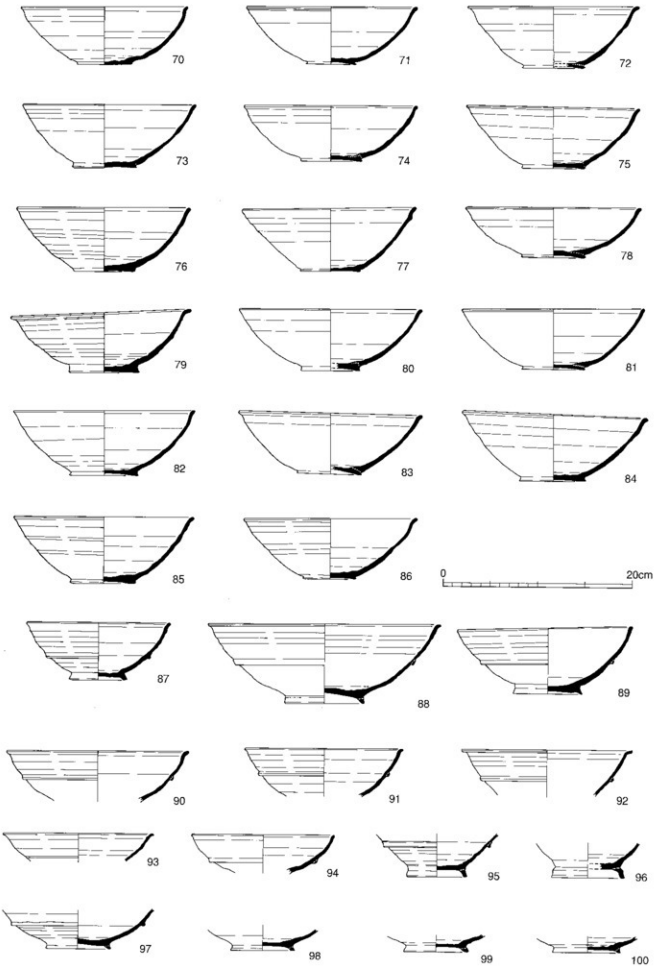


第２図

乳母ヶ懐３号窯　出土須恵器



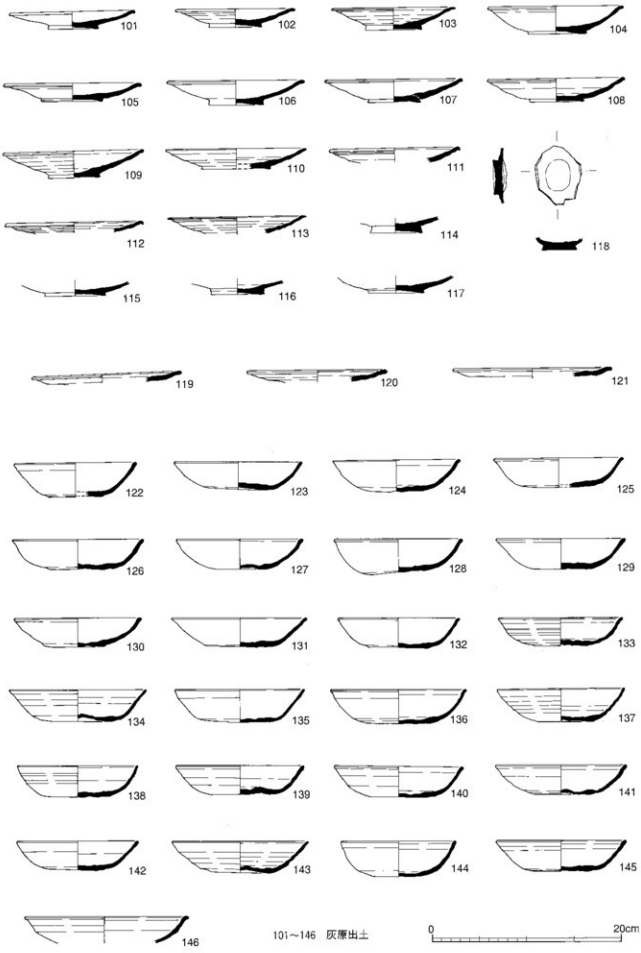
乳母ヶ懐3号窯　出土須恵器



92・96　窯体,他灰原出土

第4図

乳母ヶ懐3号窯　出土須恵器

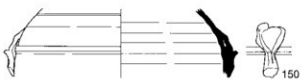


乳母ヶ懐3号窯　出土須恵器

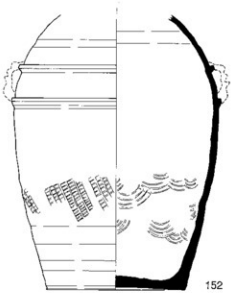
147

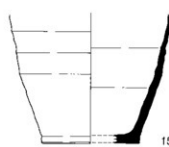
148

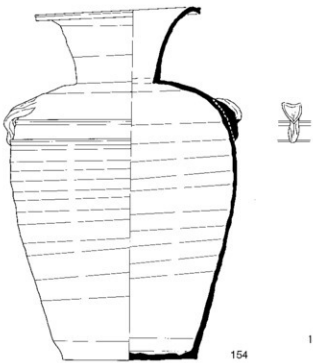
149

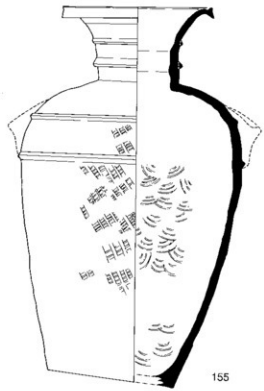

150

151

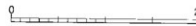

152


153


154

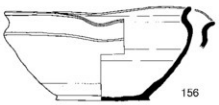

155

147～155　灰原出土



第6図

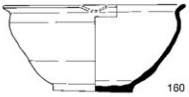
乳母ヶ懐3号窯　出土須恵器


156

157

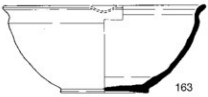
158

159

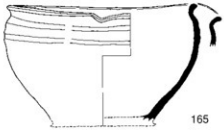

160

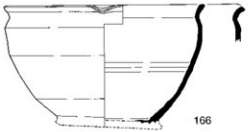
161

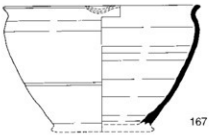
162


163

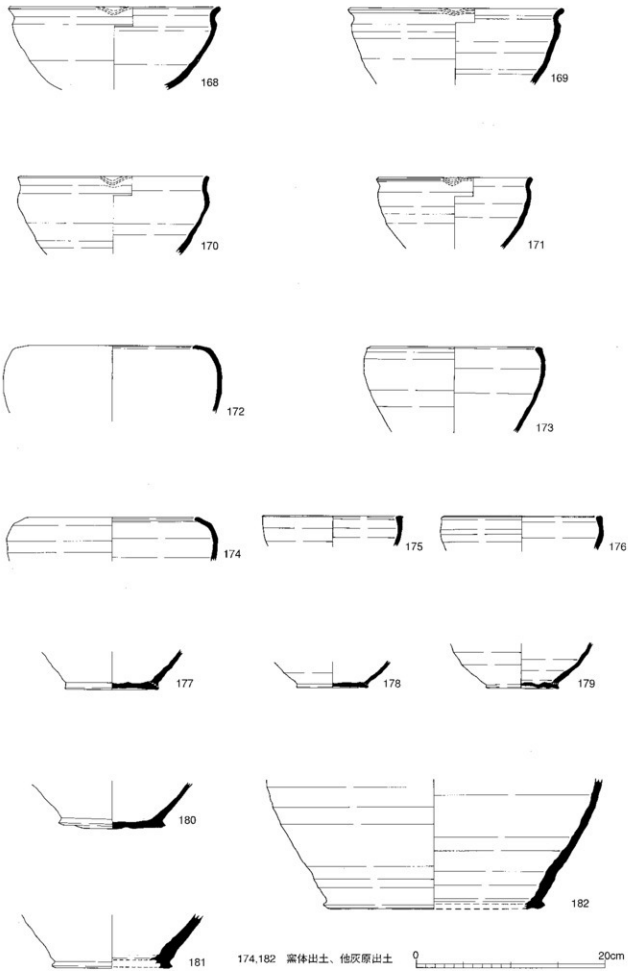
164


165

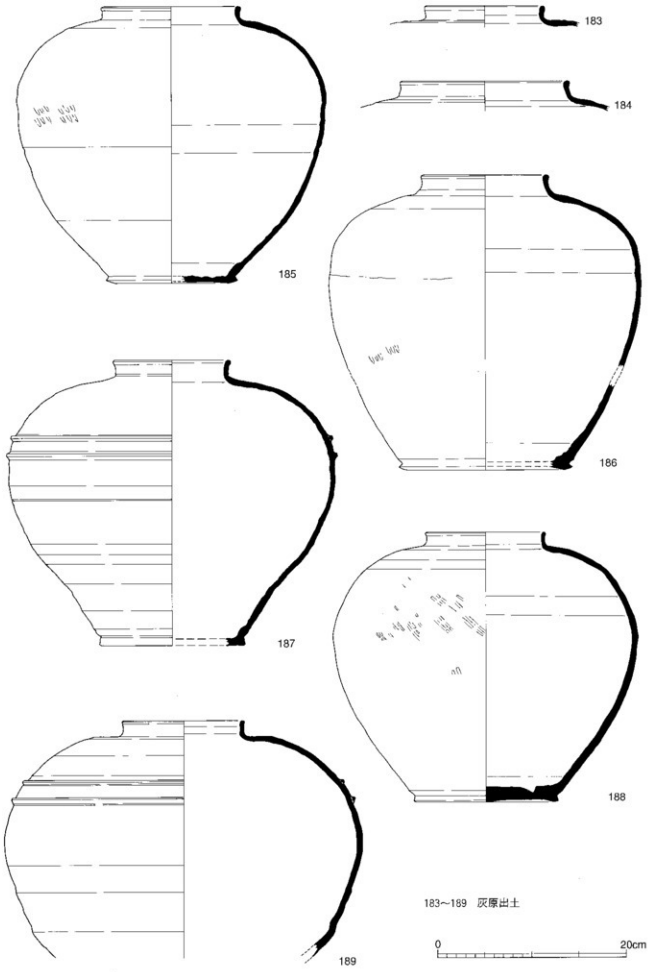

166

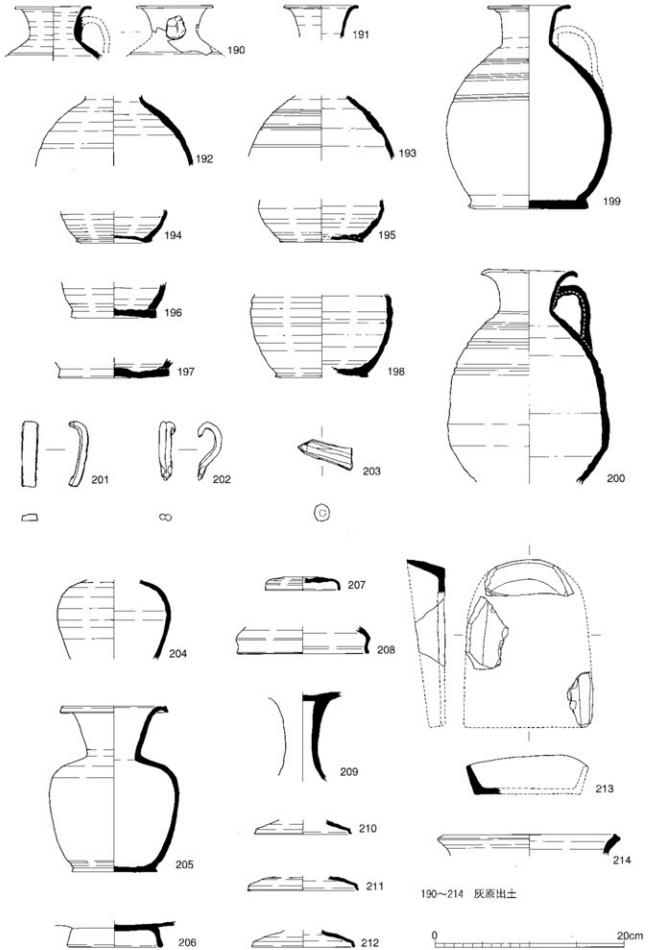

167

159,162　窯体出土、他灰原出土　0　20cm


168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
182
181
174,182　窯体出土、他灰原出土
0
20cm

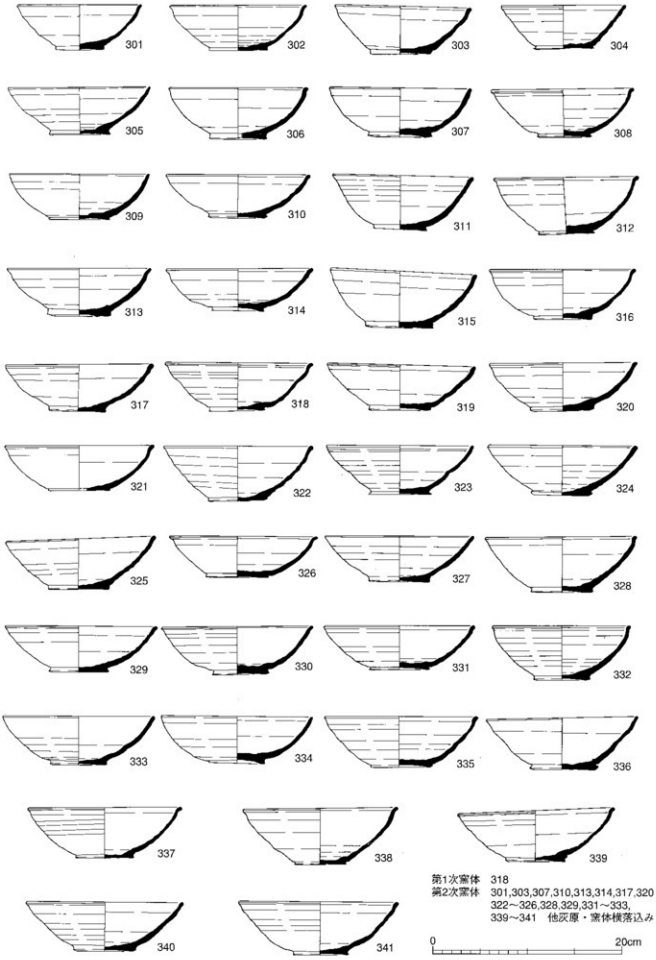
第8図　乳母ヶ懐3号窯　出土須恵器




190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
190～214　灰原出土
0
20cm

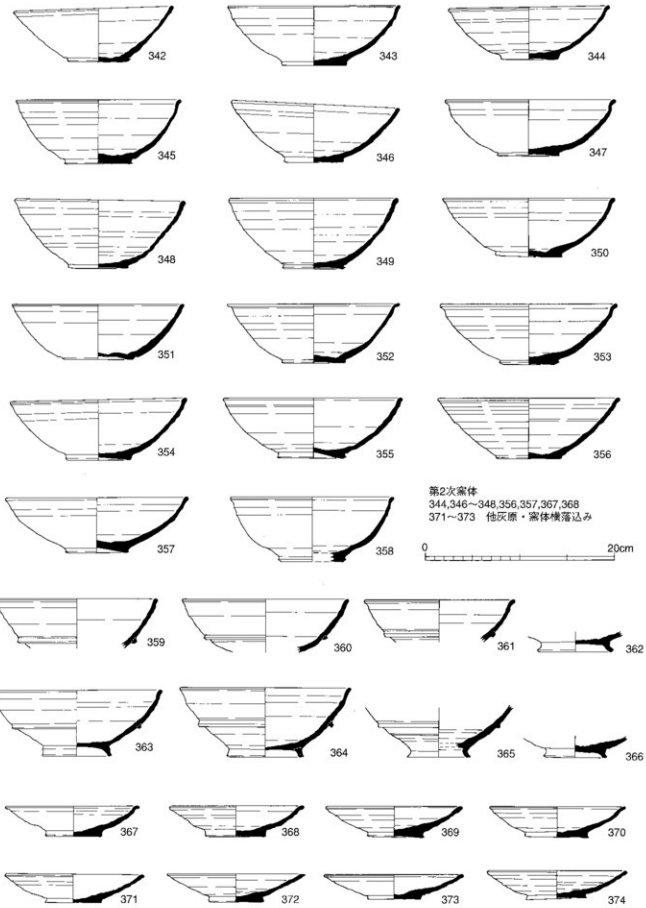
第10図

緑ヶ丘落矢ヶ谷9号窯　出土須恵器



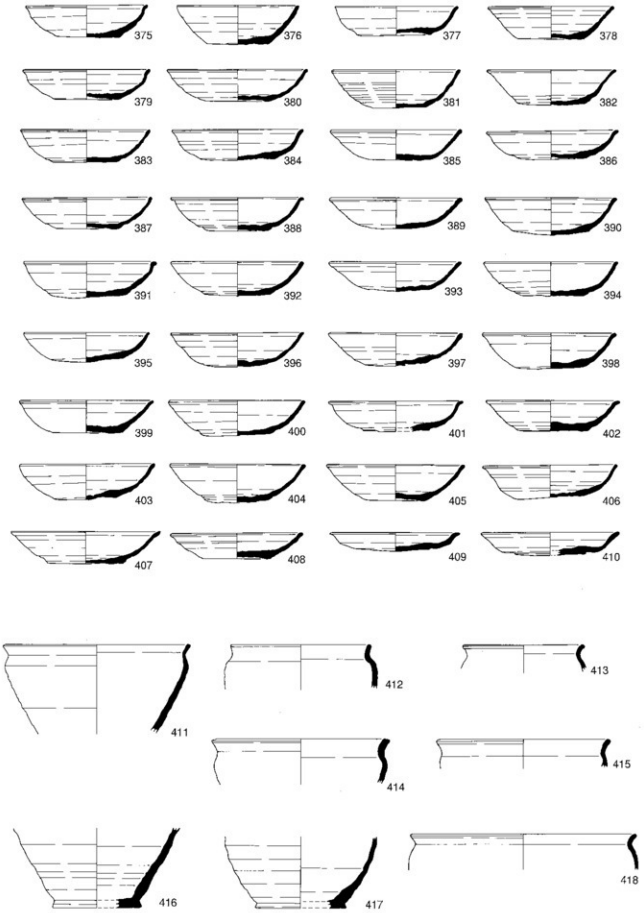
第1次窯体　318
第2次窯体　301,303,307,310,313,314,317,320
322～326,328,329,331～333,
339～341　他灰原・窯体横落込み

0　20cm


342
343
344
345
346
347
348
349
350
351
352
353
354
355
356
357
358
第2次窯体
344,346～348,356,357,367,368
371～373　他灰原・窯体横落込み
0
20cm
359
360
361
362
363
364
365
366
367
368
369
370
371
372
373
374

第12図

緑ヶ丘落矢ヶ谷９号窯　出土須恵器

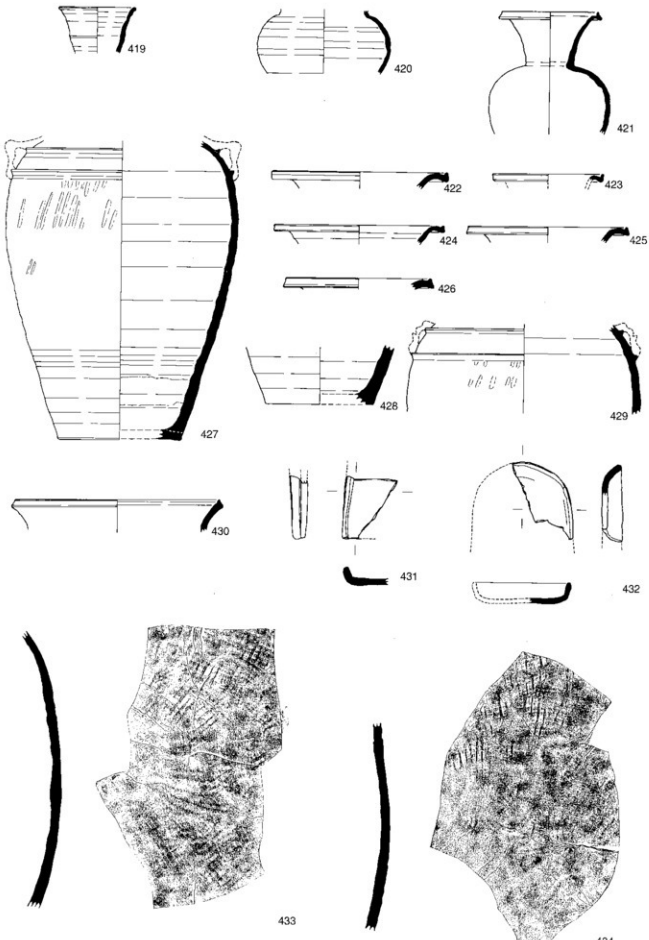


第1次窯体　381,387,394
第2次窯体　376,378,382,383,385,388,389,392,
393,397,398,400,400～406,411,412,414,416
他灰原・窯体横落込み

0　20cm

緑ヶ丘落矢ヶ谷９号窯　出土須恵器

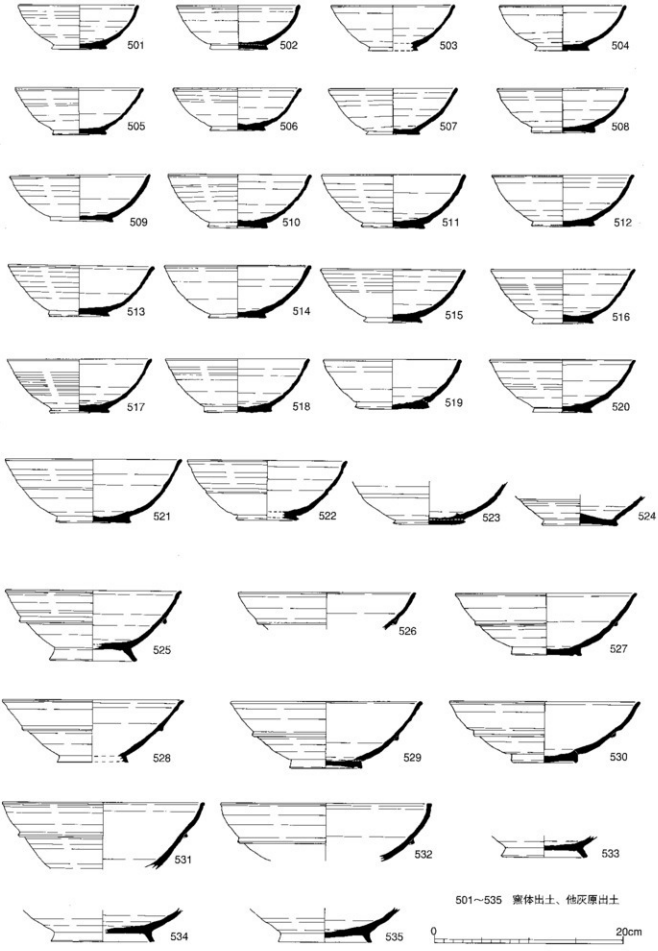
第13図



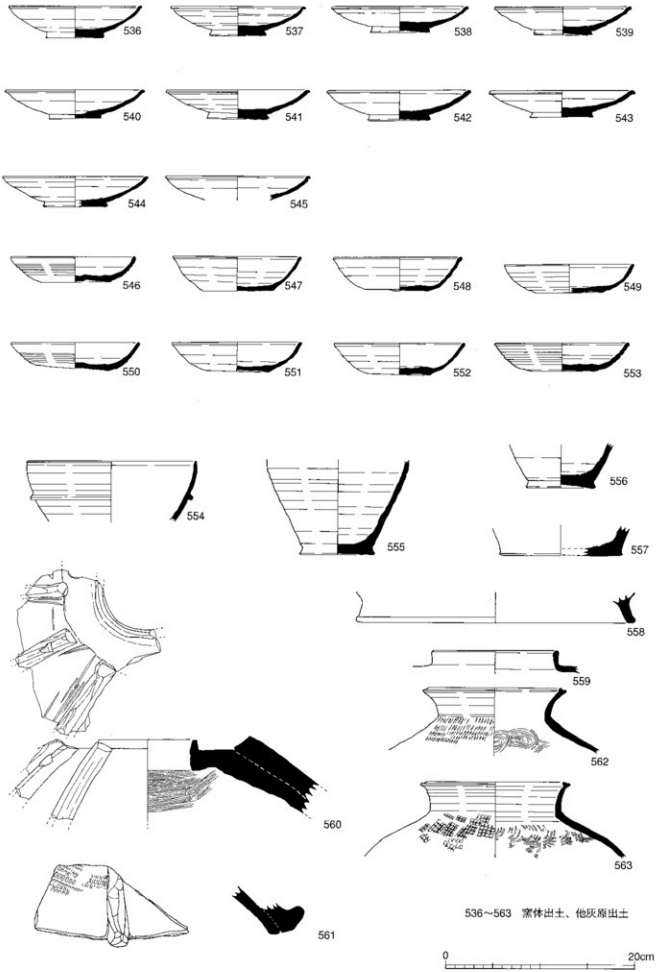
第1次 窯体 434
第2次 窯体 419、430
他灰原・窯体横落込み

第14図

緑ヶ丘落矢ヶ谷10号窯　出土須恵器



緑ヶ丘落矢ヶ谷10号窯　出土須恵器

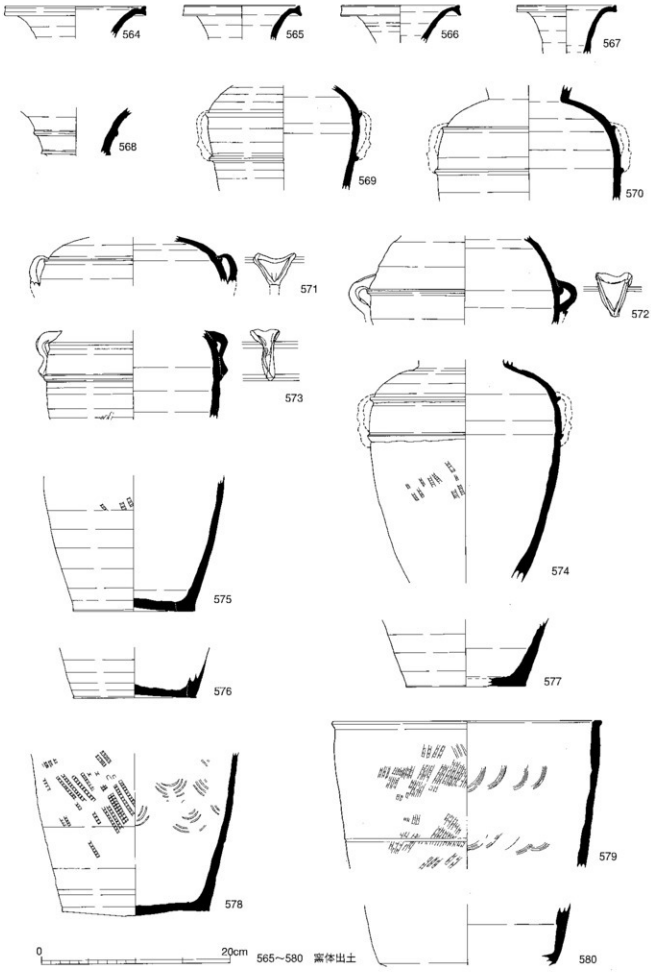


536～563　窯体出土、他灰原出土

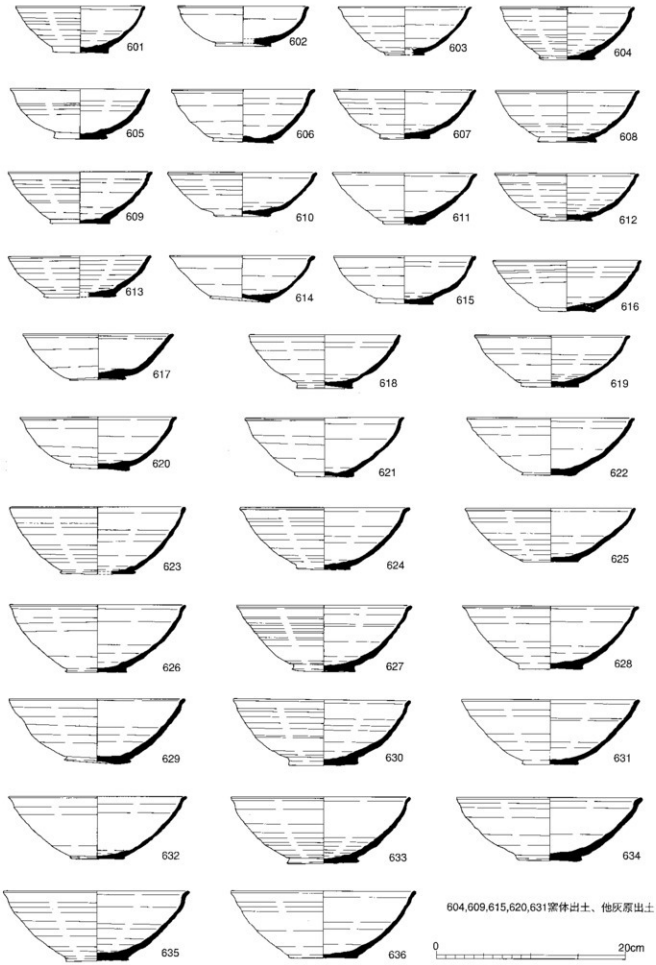
0　20cm

第16図

緑ヶ丘落矢ヶ谷10号窯　出土須恵器

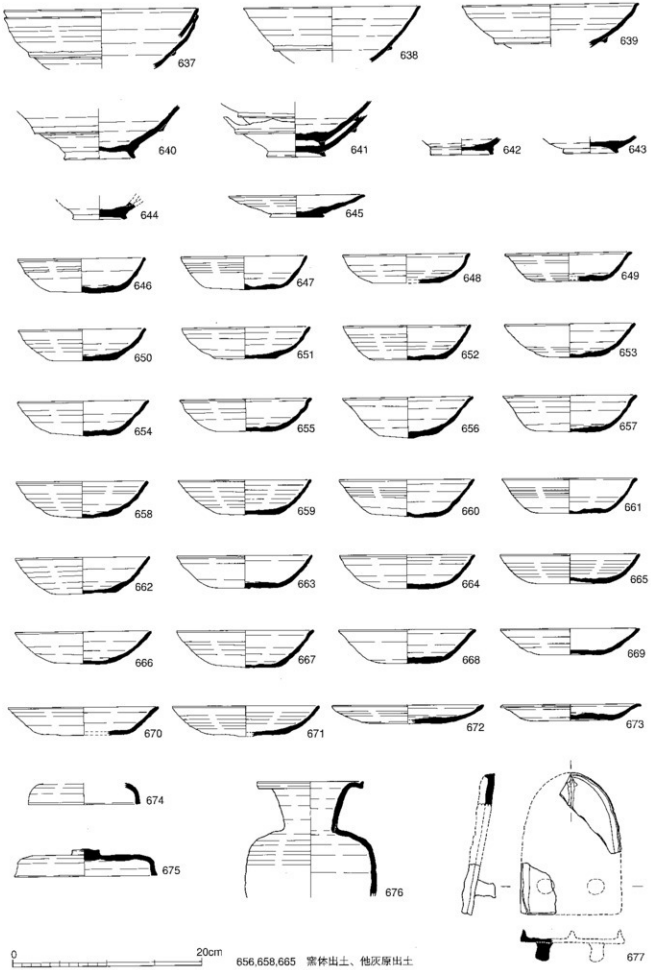


緑ヶ丘落矢ヶ谷11号窯　出土須恵器



第18図

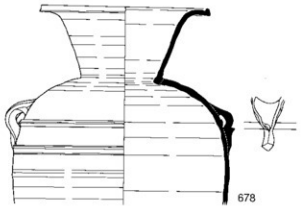
緑ヶ丘落矢ヶ谷11号窯　出土須恵器

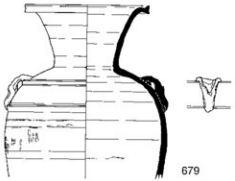


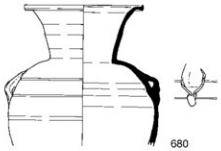
656,658,665　窯体出土、他灰原出土

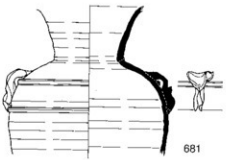
緑ヶ丘落矢ヶ谷11号窯　出土須恵器

第19図

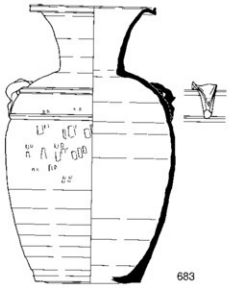

678

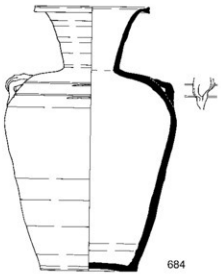

679

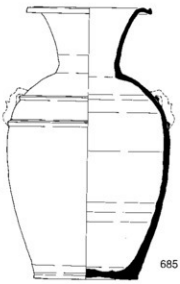

680

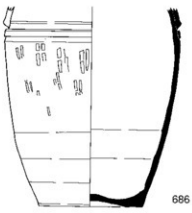

681

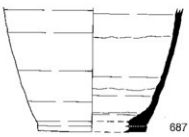
682

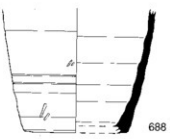

683


684


685


686


687

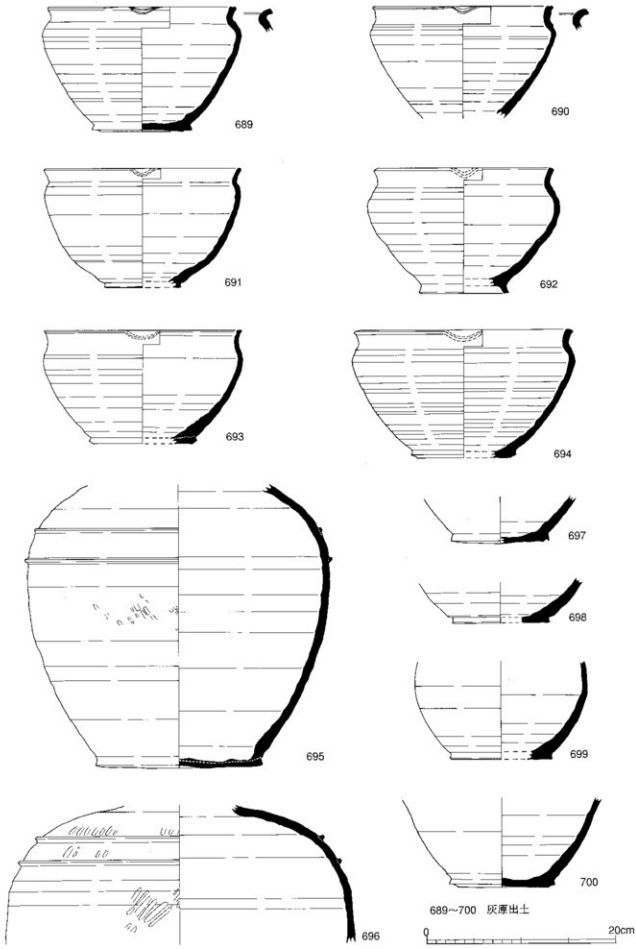

688

678～688　灰原出土

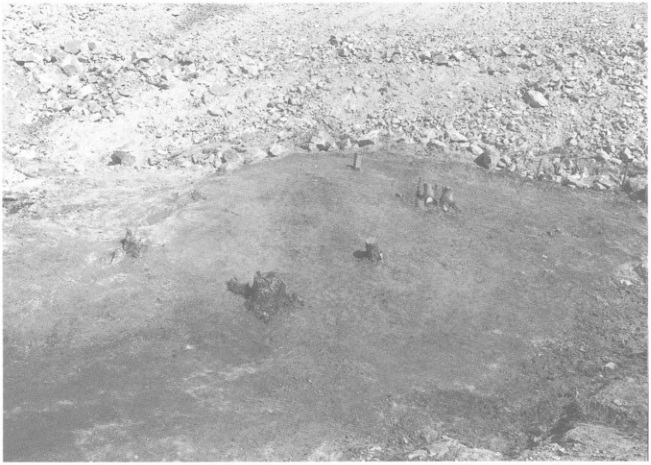
0　20cm

第20図

緑ヶ丘落矢ヶ谷11号窯　出土須恵器



写真図版

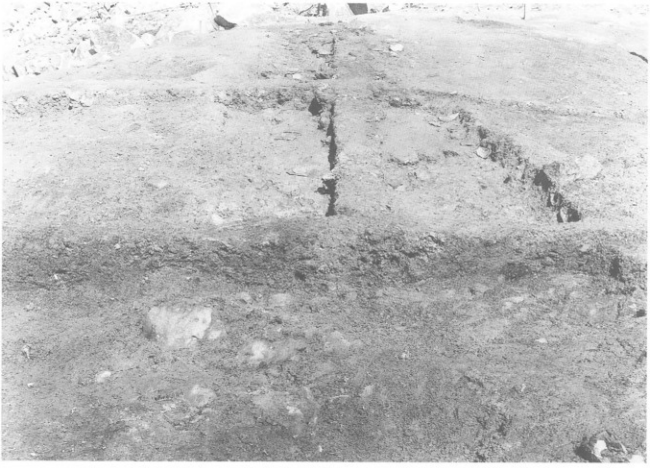


（a）検出状況

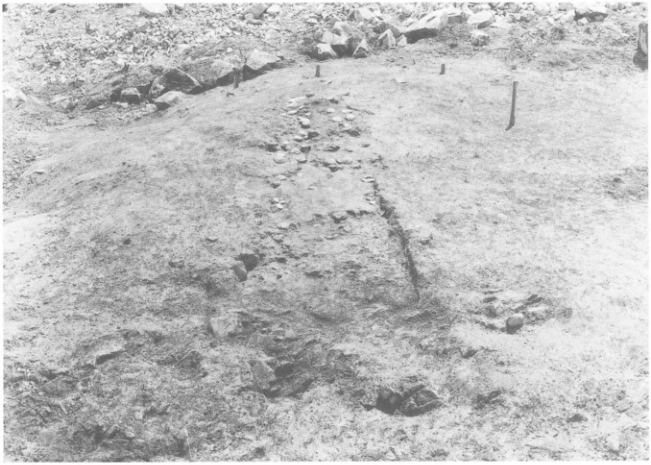
（b）セクション設定状況

乳母ヶ懐3号窯

（a）窯体・灰原縦断セクション



（b）窯体セクション



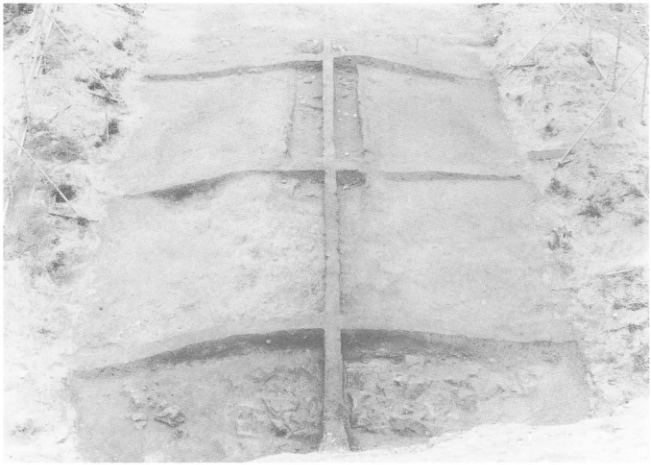
（a）窯体（遠景）

（b）窯体

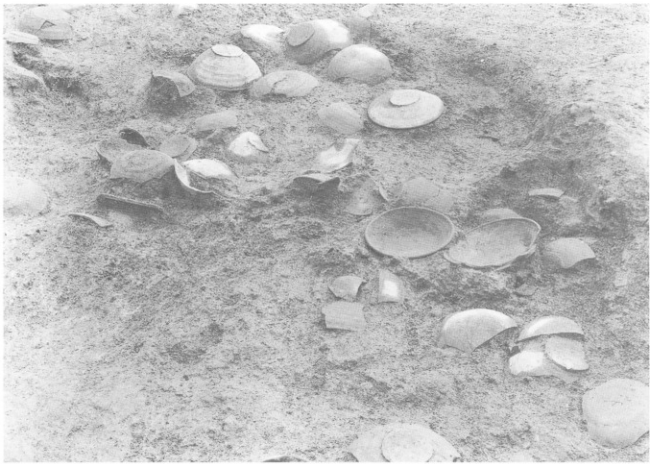
緑ヶ丘落矢ヶ谷 9 号窯

（a）調査前

（b）検出状況



（a）セクション設定状況



（b）第2次窯体　遺物出土状況

緑ヶ丘落矢ヶ谷9号窯

（a）第1次窯体（遠景）

（b）第1次窯体（近景）

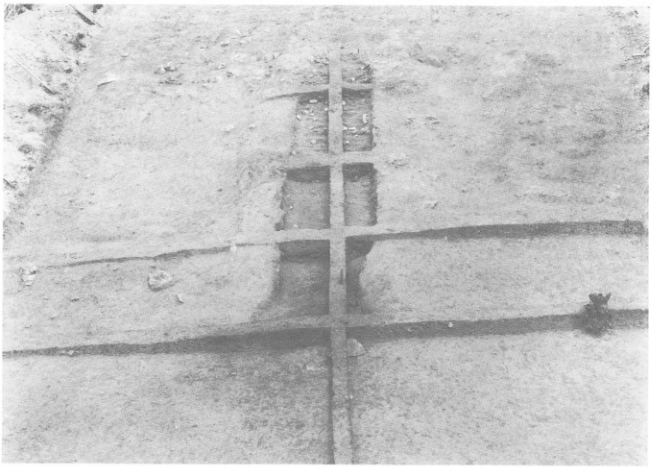
（a）第2次窯体と第1次窯体の重層状況

（b）灰原縦断セクション

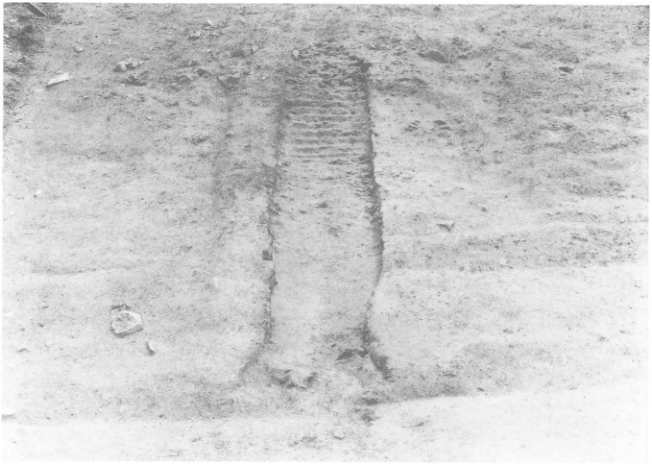
緑ヶ丘落矢ヶ谷10号窯

（a）調査前

（b）検出状況



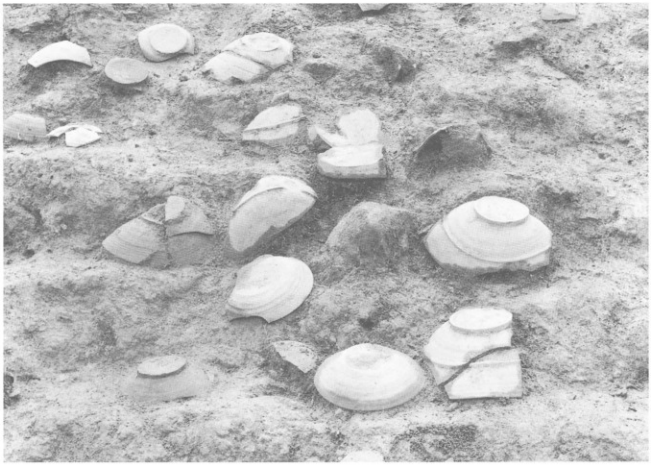
（a）セクション設定状況



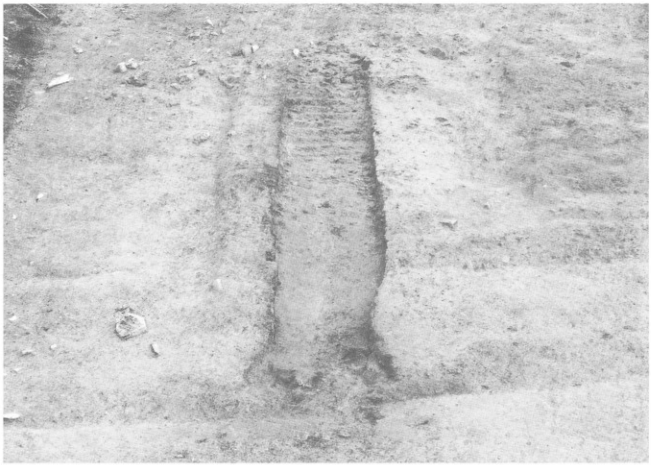
（b）窯体

緑ヶ丘落矢ヶ谷10号窯

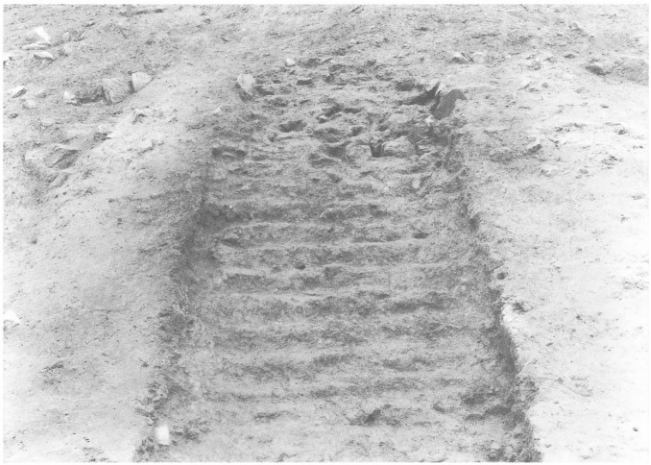
（a）遺物出土状況（焼成部先端）



（b）遺物出土状況（焼成部先端）



（a）窯体

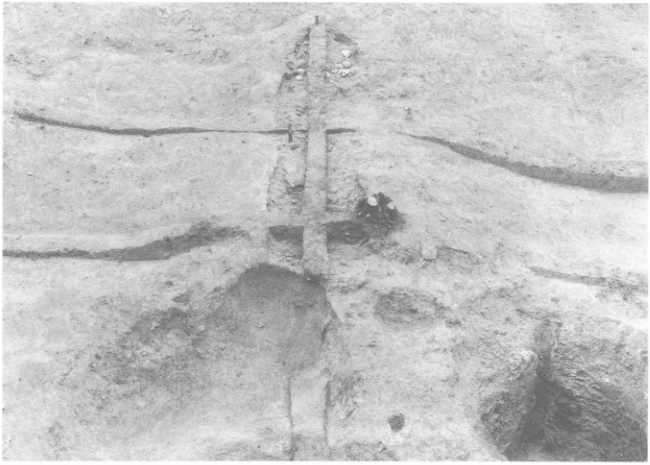


（b）窯体（焼成部先端）

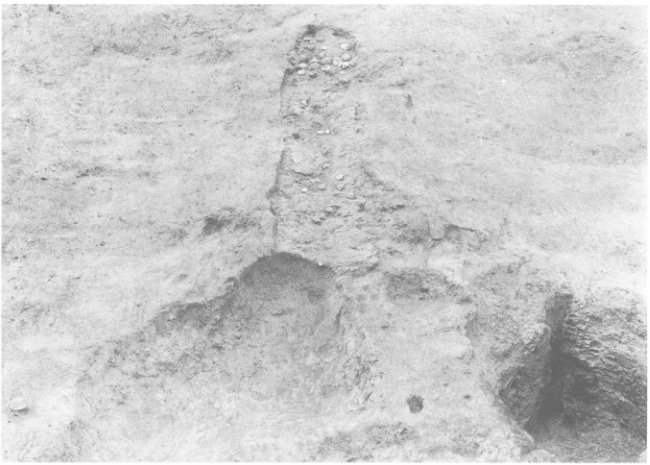
緑ヶ丘落矢ヶ谷11号窯

（a）調査前

（b）検出状況



（a）セクション設定状況

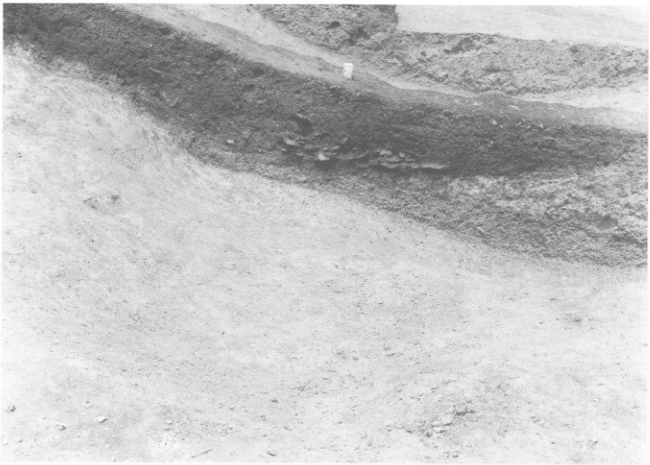


（b）窯体

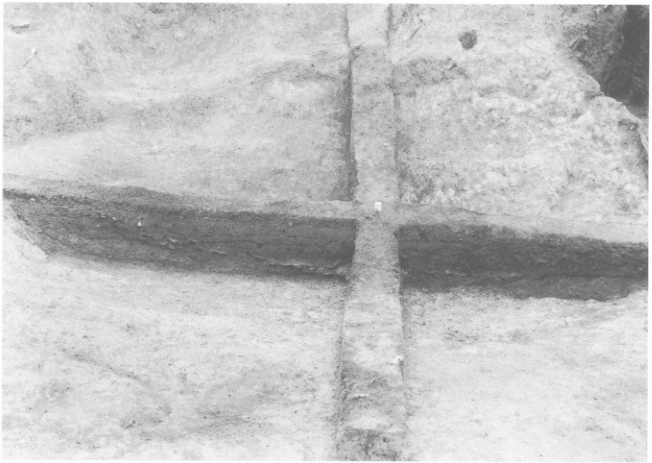
緑ヶ丘落矢ヶ谷11号窯

（a）遺物出土状況（焼成部先端）

（b）遺物出土状況（焼成部中央）



（a）灰原縦断セクション



（b）灰原横断セクション

緑ヶ丘落矢ヶ谷11号窯

（a）窯体（遠景）

（b）窯体（近景）

1

2

5

6

9

10

11

12

14

15

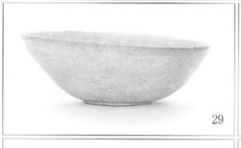
19

20

21

23

27


29

33

34

37

39

40

乳母ヶ懐3号窯　出土須恵器

42

43

44

45

47

48

49

59

62

63

65

67

71

75

76

77

79

83

84

85

86

88

89

101

102

103

104

105

106

108

110

123

124

126

127

128

129

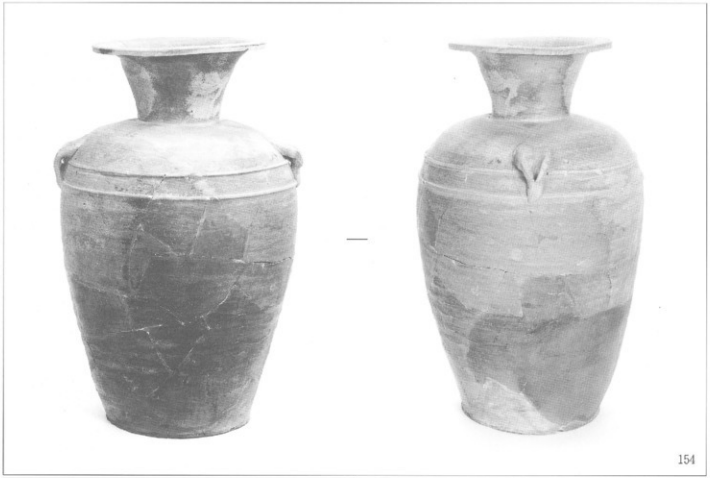
130

131

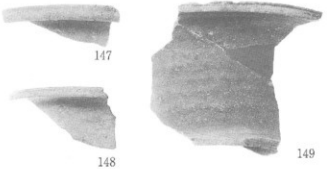
132

135

乳母ヶ懐3号窯　出土須恵器



154



147

148

149

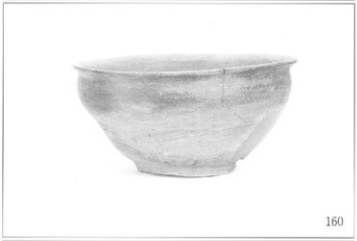
151

150

155

156

158


160

161

163

164

165

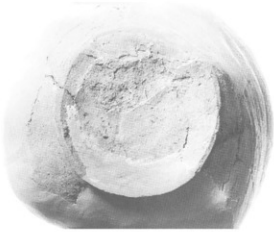
166

乳母ヶ懐3号窯　出土須恵器

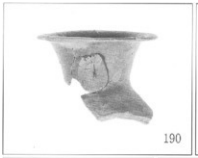
185

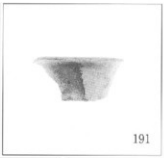
187

189


188

186

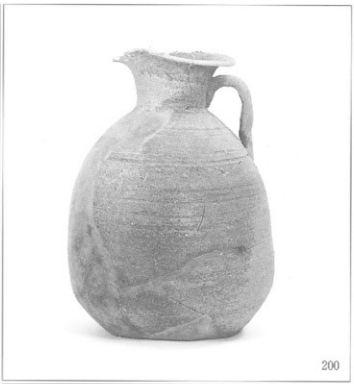

190


191

203

201

202


200

199

205

緑ヶ丘落矢ヶ谷9号窯　出土須恵器

301

303

308

310

312

315

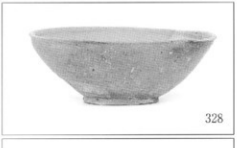
317

319

321

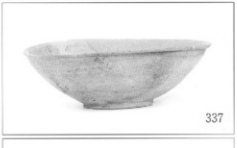
322

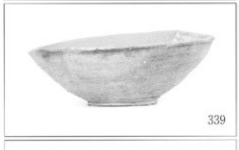
325


328

329

333

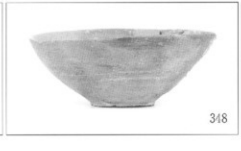

337


339

341

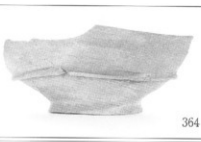
342

346


348

354

363


364

365

367

369

370

371

372

373

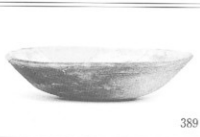
375

377

383

384

385


389

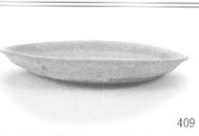
390

391

393

394

400


409

緑ヶ丘落矢ヶ谷９号窯　出土須恵器

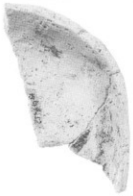
421

427

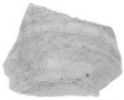
419

420

431


432

416


417

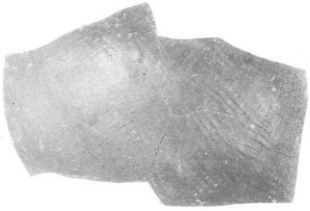
415

418

411

412

414


433

501

502

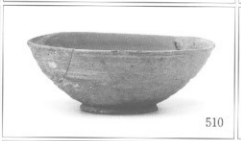
504

505

506

507

509


510

511

513

514

517

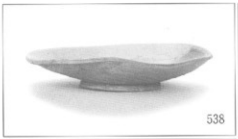
525

527

529

530

緑ヶ丘落矢ヶ谷10号窯　出土須恵器

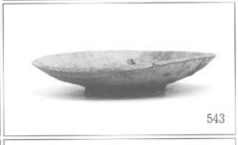

538

537

540

541

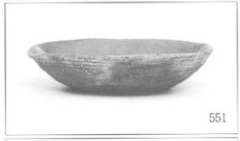
542


543

546

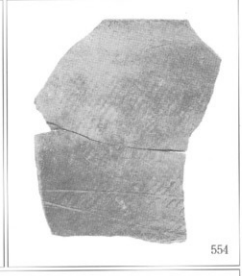
547

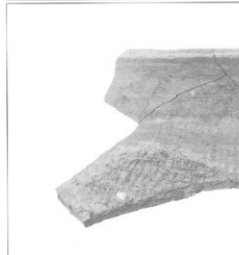
550


551

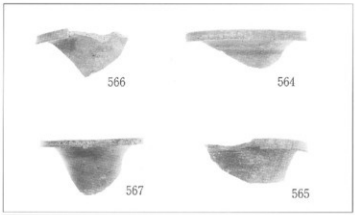
556

555


554


562

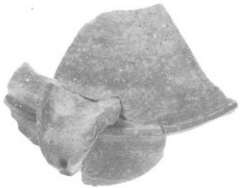
563


566

564

567

565


572

574

573

578

560

緑ヶ丘落矢ヶ谷11号窯　出土須恵器

601

605

606

614

615

616

617

620

621

622

623

624

625

626

627

629

630

633

634

635

636

646

651

654

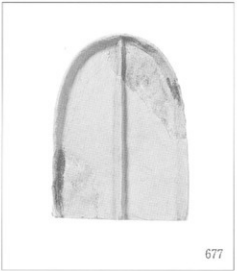
655

656

657

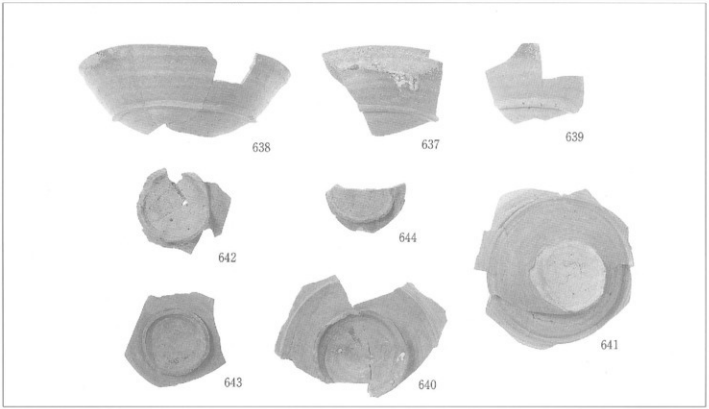
660

666

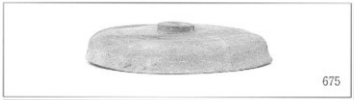

677

667

645



緑ヶ丘落矢ヶ谷11号窯　出土須恵器


675

676

680

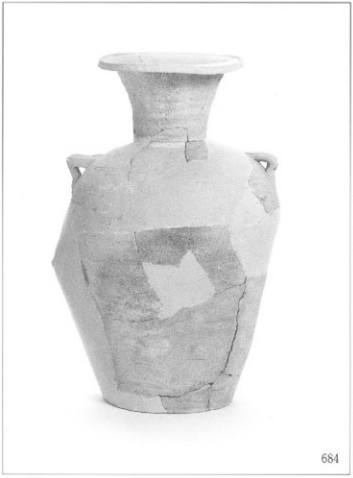
682

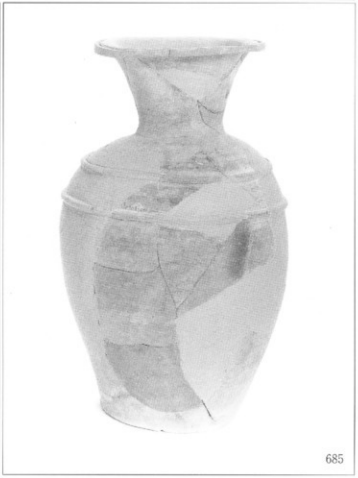
678

679

681

683

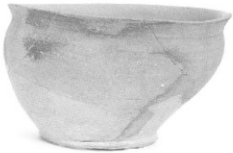

684


685

緑ヶ丘落矢ヶ谷11号窯　出土須恵器

690

692


693

689

691

696

697

695

相生市・緑ヶ丘窯址群Ⅱ

—山陽自動車道関係
埋蔵文化財調査報告Ⅻ—

平成7年（1995年）3月31日　発行

編　集　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号
TEL078－531－7011

発　行　兵庫県教育委員会
〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷所　株式会社リョーイン